

大賞

「群青」 松本愛海

優秀賞

「傷口」

今仁恵林

「海辺の光―ある作家へ―」

うしかわれきし

「春が来るまで」

奥山みつき

第14回熊本大学

東光原文学賞作品集



2022年3月発行
熊本大学附属図書館
Kumamoto University Library

第十四回 熊本大学東光原文学賞作品集

第十四回熊本大学東光原文学賞作品集 目次

館長のことば
熊本大学附属図書館長 田中朋弘 / 4
第十四回東光原文学賞作品集の公刊によせて

大賞

群青

松本 愛海 / 7

(文学部総合人間学科四年)

優秀賞

傷口

今仁 恵林 / 31

(文学部文学科三年)

優秀賞

海辺の光 ―ある作家へ―

いらかわれきし / 66

(文学部文学科三年)

優秀賞

春が来るまで

奥山 みつき / 94

(文学部コミュニケーション

情報学科一年)

選考を終えて

坂元 昌樹 「東光原文学賞総評」 / 132

松岡 浩史 「講評」 / 137

岩瀬 茂美 「講評 新しい自分と出会う」 / 141

第十四回東光原文学賞作品集の公刊によせて

附属図書館長 田 中 朋 弘

東光原文学賞は、熊大生の言語力向上と創造性豊かな学生の育成、さらに地域社会における文学・文化活動の中核となる人材輩出等を目的に、平成二十年度にスタートした熊本大学独自の文学賞で、今年で十四回目の開催となります。

今回は十七篇の応募がございました。応募者の内訳は、文学部八篇、教育学部三篇、法学部一篇、薬学部二篇、工学部二篇、大学院社会文化科学研究部一篇となっております。まずはさまざまな学部や大学院からご応募くださった方々全員に、厚くお礼申し上げます。

これらの応募作品から、九篇を第一次審査で選出してくださいました第一次選考委員の方々、さらに九篇のうちから四篇を大賞、優秀賞候補として選出してくださいました第二次選考委員の方々に厚くお礼申し上げます。また、東光原文学賞募集要項の作成からニューズレターの印刷配布まで周到な準備をしてくださった図書館課の皆様および関係各位にも、附属図書館長として厚く御礼申し上げます。

さて、第二次選考委員会は、昨年十二月十三日に開催され、選考委員長の坂元昌樹先生（大学院人文社会科学研究所（文学系）教授）、松岡浩史先生（大学院人文社会科学研究所（文学系）

（准教授）並びに、岩瀬茂美先生（熊本日日新聞社統合編集本部長兼論説委員）の御三方によって、それぞれの観点から講評が述べられたのち、委員の間で意見交換が行われ、審査は厳正に進められました。

門外漢のわたしですがその様子について語るのも気が引けるのですが、少しでも審査の雰囲気をお伝えしたいと思います。審査委員の先生方は、それぞれの作品をとても丁寧に読んでおられ、かつ作品を読むことそれ自体をとても楽しんでおられることがよくわかりました。読み手として作品を楽しむことと、それらについて適切に論評することを、同時かつ高度に両立されていることに、わたしは感銘を受けました。また、委員の先生方のご意見は、大枠ではそれほど分散せず、むしろ一致している部分が多いことにも、なるほどと思った次第です。

作品それぞれの詳細については、選考委員の先生方の講評にお任せするとして、少しでも一読者としての感想を述べさせていただきます。全体の最初の読後感としては、どの作品も入念に作りこまれているということがありました。わたしも日ごろから様々なタイプの文章を読みますし、書きもします。しかし、自戒も込めて言うならば、それらには入念さや細心さという点でその都度、程度の差があるように思います。入念で細心に書かれたものには、全体に「気遣い」がいきわたっていると言い換えてもいいかもしれません。じぶん自身の言葉を丁寧に紡いでそれを形にし、さらにそれらを研ぎ澄ます作業を時間をかけて行うとき、わたしたちはその作品のことを丁寧に気遣っているということができません。それは更に言えばおそらく、書き手の気持ちだけでなく、読み手の気持ちも気遣っている、とも言えるでしょう。

表現行為一般の常として、作り手と受け取り手の間にはいつも何らかのギャップが存在することは確かですが、それを文学という手法を用いて何とか乗り越えようとする行為は、「氣遣い」の現れとしても極めて人間的であり、尊敬に値する営みだと思えます。作品を創作し応募するというこの経験が、皆さんの学生生活の中でそれぞれに輝きを放つものであったはずだと確信しています。受賞した皆さんはもちろんですが、この文学賞に応募してくださったすべての皆様に、再度、お礼と感謝の気持ちを述べたいと思います。ありがとうございます。またこの作品集を読まれた人が、ぜひご自分でも作品を生み出し応募してください。心から祈念いたします。

以上をもちまして、附属図書館長のご挨拶とさせていただきます。



上段：松岡・坂元・岩瀬

下段：今仁・田中・松本・濱田・三浦

群青

松本 愛海

おや。こんばんは。こんな夜更けにお客さんかな。珍しいこともあるもんだ。：病院の面会時間とはとくに過ぎていると思うのだけれど。不思議な日だね。今日、私に会いにきてくれたのは君で二人目だよ。

まあ、こうして会えたのも何かの縁なのでしょうなあ。

外は雨が降っていたのでは？暗くて足場も悪い中、よく来てくれたね。嬉しく思うよ。

ん？どうして気付いたのかだって？ふふ。この古いぼれの目はもう碌に物を映さないけれど、目に見える世界が全てではないんだよ。空気の振動や匂いは私に色んな世界を教えてくれる。

それに、君が来てから雨の匂いが強くしたものだから。それと、何だか君から懐かしい匂いが

したんだ。

あったかくて、それでいて……。ああ、ふふ、本当に懐かしいなあ。

そうだ、お客さん。あなたさえ良ければだけど、私の独り言に付き合ってはくれないかね。長い、長い独り言になると思うけれど。

今夜は目が冴えてしまってね、まだまだ、どうにも眠れそうにないんだ。

ベッドの横に椅子があったはずだよ。ああ、おそらくそれだ。

ふう。一人のしがない老人の昔話さ。聞いてくれるかい？

ああ、ありがとう。

私の生まれは東北の小さな漁村でね。晴れの日が少なく、冬の寒さが厳しい所でしたよ。村の

男のほとんどが漁師で、男の子は代々親のあとを継ぐことが当たり前でした。私の父も漁師でした。毎日海で泳ぐこともありました。そんな村で育ちましたから、海はいつも身近にありました。私はそこで母と、五つ歳の離れた弟と暮らしていました。父は早くに亡くなりました。弟が生まれたその年の冬の事です。海に流されました。父は寡黙な人でした。談笑する姿も、怒鳴っているところも見たことは無かった。父と会話した記憶もほとんどありません。ですが私にとって父は大きな存在でした。海へ向かう後ろ姿はとても大きかった。たまにぶっきら棒にガシガシと頭を撫でてくる大きな手は暖かく、煙草と海の匂いがしました。

ああ、今でも鮮明に思い出せます。…大切な思い出です。

父はある冬の夜に村の男たちと船の様子を確認してくと家を出て行って、そのまま帰ってきませんでした。父が流された日のことはよく覚えていますよ。ええ。身体の芯から冷えるような冬の日で、家の外は激しく吹雪いていましたね。父は普段、冬になると出稼ぎに出かけるのですが、その年の冬のその日は偶々帰省していたんです。おそらく、弟の顔を見に来たんでしょうね。夜中、私は寝ていたところを外のざわめきでふと起きました。大人たちの喚き声、母の焦った声、轟々と鳴る吹雪の音、赤ん坊の泣き声。私は布団の中でじっと聞いていました。状況はよく分かりませんでした。ですが、何か大変なことが起きている事は分かりました。経験したことの無い夜。いつもと違う家の中が気にはなりましたが、それよりも言いようの無い不安感に襲われまし

た。真っ黒い、おぞましい何かが自分に纏わり付くように感じて、それがとにかく怖くて怖くて。布団を頭から被り、裾をぎゅっと握りしめながら起こされるまでじっと丸まっていました。

後日、聞いた話によると父は海に転落した人を助けようとして自分も巻き込まれたそうです。私は父が帰ってこない事実を受け入れられませんでした。幼かったですしねえ。父が流された次の日に見た海は、昨日の出来事が何もなかったかのように凜いでいたのを覚えています。不思議でした。恵みをもたらすはずの海が、私の父を奪ったのですから。海は、私にとって只の遊び場ではなくなりました。

私は父が流された時から、海に入れなくなりました。生まれた時から側にあった海が恐ろしくなったのです。一度、そのように認識するともう駄目でした。冬が明けてからも、私は海に近づけませんでした。そんな私を、大人たちは心配しながらもそっとしておいてくれました。父が流されたショックから立ち直れないのだろうと、時間が解決してくれるだろうと。母は悲しそうな顔をしていましたが何も言いませんでした。ですが、子どもたちは違いました。今まで一緒に海で遊んでいた奴が、急に海に入らなくなりました。泳ぎに誘っても乗ってこない。私はすぐに彼らの中で気に食わない奴になりました。子どもは感情に素直です。ね。からかわれ、馬鹿にされ、仲間外れにされました。ですが、私は仕方ないことだと諦めていたのです。漁村で生きる者にとつて海と関わらずに生きていくことは不可能ですからね。子どもながらに分かっていました。それ

でも、海は怖かったです。海を見るたびに、あの夜の喧騒と布団の冷たさ、父の大きな後ろ姿が浮かぶのです。子どもたちから仲間はずれにされるよりも、大きかった父を容易く飲み込んでいった海の方が、私には怖かった。

海で遊んでいた活発な少年は、父と一緒に流されてしまったのでしょうか。残されたのは小さな臆病者の少年です。

それから、村では独りぼっちの幼少期を過ごしました。学校でも友達はできなかった。虐められることもありました。時間が経つに連れて、大人たちも腫れ物に触るかのように接してくるようになりました。小さな村でしたから、海に入れない臆病者として村中に知れ渡っていました。この頃はとにかくしんどい思いをしました。海に入れない己が悪いのだと思いつめ、いつ捨てられるかとビクビクしていました。母の顔は見ることは出来ませんでした。その目に落胆の色が浮かぶのが怖かったです。弟に対しても、兄らしいことなんて何一つしてやれなかった。自分を取り巻く全てのものを恐れていました。

ああ、大丈夫ですよ。少しその時の感情に引っ張られてしまいました。心配なさらなくてください。情けない話ですが、今でも思い出しても気分が沈んでしまいます。そして、この後も私にとって辛い出来事が続きました。

私が十を少し過ぎた頃、同級生に海岸に呼び出されました。いつもは無視をしてやり過ごすのですが、その日は父を侮辱され、珍しく頭に血が上ったのです。奴らは私に向かって、こんな臆病者の息子を持つ父親だったから海に流されたのだと言ったのです。許せなかった。思わずそんな事は無いと怒鳴り返しました。父は立派な人でした。私は、父を馬鹿にされるのだけは許せなかつたんです。奴らは、それならば臆病者でないと証明しろと言って、村に一つある崖から海へ飛び込めと言ってきました。この村の少年たちにとって、この崖から海へ飛び込む行為は勇気ある者の象徴として捉えられていました。私は思わずやってやるさと言いつ返し、その日の学校終わりに海岸への呼び出しに応じました。その日は初冬で風は冷たかった。天候も良くなかつた。どんよりと鉛色の空が広がり、灰色の海がざぶりと敵っていました。呼び出した同級生たちはニヤニヤと笑いながらこつちを見ていました。更に、先の暴言を認めれば許してやるとさえ言うてきましたよ。ああ、私の情けない姿を期待していたのでしょうかね。その姿を見て幼い嗜虐心が満たされるのなら何を言っても良いと思っていたのでしょうか。この言葉が私にとって、どんなに、どんなに重いかさえ知らずに。私は地面を蹴り、勢いをつけて海へ飛び込みました。

ええ、そうです。飛び込んだのですよ。あんなに海を怖がっていた少年が冬の海に。頭の中ではガンガン警報が鳴っていましたよ。足は震え、握りしめた手のひらには爪が食い込み、心臓はドクドクと波打ってその振動が身体中に伝播していったようでした。しかし、荒ぶる身体とは裏

腹に心は静かに燃えていました。その静かなる炎が、海への恐怖心を凌駕したのでしょね。

飛び込んだ後の記憶はあまりありません。どふんと鈍い音を聞いた気がしますが、定かではありません。気が付いたら家の布団の上で寝かされていました。全身が痛くて、熱かった。私が起きたことに気付いた母は、私が三日も意識が戻らなかった事を伝えてきました。そして、右目の視力と右の人差し指を失った事も。何を言っているのだらうと、働かない頭でぼんやりと母を見つめました。確かに、視界は暗くて右目と右手は他よりも熱かった。じわじわと現実が頭にしみ込んでくるのを拒むように、ただじっと母の顔を見つめました。久しぶりに見る母の顔でした。記憶にある母の顔より少し老けていました。母さん、とぼつりと呟くと、母は黙って静かに頭を撫でてくれました。何度も、何度も。手のひらの温かさを感じながら、私は母の皺の数を静かに数えていました。

私の右手、人差し指が無いでしょう？この時に失いました。今では光を僅かに感じるだけの目も、右目はこの時からずっと暗いままで。医者にはこの程度で済んで良かったと言われました。命を失っていても不思議ではなかったと。むしろ生きてるのが奇跡だとも言っていました。当時は今のように医療が発達していませんでしたし、小さな村でしたから医者もいなかった。少し離れた町の医者に診てもらったのも、私が飛びこんだ日の二日後でした。

私が海へ飛びこんだ後、同級生の彼らは浮いてこない私に気付いて慌てて大人を呼びに行ったそうです。大人たちによって私は救助されましたが、見つけた時には全身傷だらけで意識はなかったと聞きました。医者は、波に揉まれ岩肌に体をぶつけた際に、右目は潰れ指がちぎれたのだろうと言いました。感染症にかかってもおかしくなかったとも、凍傷で死んでいてもおかしくはなかったとも。そして再度私に言うのです。生きているのは奇跡だと。良かったですねと私に微笑みかけた老齢の医者顔を私は忘れません。信じられなかった。何を言っているのだろうと思います。私は絶望したのです。何度も奇跡だと告げる医者を憎みさえしました。これから先、私が海で生きていくことが叶わないと言う事を理解してしまったのですから。それはもう深く、深く絶望しました。私はどこかで期待していたのでしょうね。いつか海を恐れなくなり、父のように立派な漁師になれる日がくる事を。淡く抱いていたそのような思いは真っ黒な絶望に変わりました。私に海へ飛び込むようそそのかした同級生は親とともに家に来ましたが、私は頑なに会いませんでした。学校にも行かなくなりました。毎日布団に横たわって只きつく目を閉じていました。起きていたくなかった。深く眠っていたかった。現実を受け入れたくなかった。目が潰れた事も、指が無くなった事も、漁師になれない事も。何も考えたくなくなかった。

ええ。私、漁師になりたかったのですよ。漁師と言うより、父のようになりたかった。それに、漁師の子は漁師になるのが当たり前な村でしたから、漁師になれば父の子だと胸を張って生きて行けると思っていたのです。海を恐れていても、いつかは、とね。村一番の臆病者の少年は、実

は誰よりも海に焦がれ思いを馳せていたのですよ。だから、本当にこの時は立ち直れなかった。ぼきりと心が折れてしまったのです。

私はそれから同じ毎日を過ごしました。ふたつき以上はそうしていたと思います。私は空っぽでした。そしてある日、ふと消えたいという思いが湧き上がりました。死にたいと思ったのはありません。私の存在ごと消してしまいたいと思っただけです。自分を取り巻く全てのものから逃げたかった。思い立ったその日の晩に、私はこっそりと家を抜け出しました。奇しくもその日は父の命日でした。私は海へと向かいました。海に溶けてしまおうと思ったのです。海を恐れ、海に焦がれた自分が海と一つになる。なぜだかとても素敵なことに思えました。それに、なんとなく父に会えるような気がしたのです。その日は珍しく無風で、雪も降っていない静かな夜でした。いつもは荒々しく響く波音でさえ静かで、海が眠っているかのように感じました。世界の全てが自分に無関心なように感じて、何故だかそれが心地好かった。

そして、私が砂浜に降り立ったとき、ふっと雲の切れ間からまんまるの月が覗きました。目が冴えるほどに黄色く、輝かんばかりの明るい月でした。そこから水面に一筋の道を映し出し：私は、この時の光景を一生忘れないでしょう。

しんと身に沁みる透明な空気の中
眼前に広がるは一面の、群青。

深く深く、どこまでも深く、吸い込まれそうな濃い色。

ぬらりと揺れる水面に月の光がきらきらと反射して静かに跳ねる。跳ねる。

群青。群青。群青。群青。きらりと跳ねる。群青。

ああ、この世にこんなに心動かす色があるのかと、この世にこんなに目を奪われる情景があるのかと思いましたね。私は瞬きも忘れてざぶざぶと海へと入って行きました。不思議と全く怖くなんてありませんでした。ちっとも寒くなかった。どこまでも進んで行きたかった。この群青に溶けてしまいました…。

けれど、私は群青に溶けることはありませんでした。腰のあたりまで進んだ時、ふと私の名前

を呼ぶ声が聞こえました。振り返ると、母が寝間着姿のまま海へ入ってきていました。何度も私の名前を呼びながらばしゃばしゃと波をかき分けて向かってくる様子を、私はただぼんやりと眺めていました。母は私に追いつくと、力の限り私を抱きしめました。強く、きつく、離さないというように抱きしめました。母は泣いていました。私はびっくりしました。母が泣いている姿なんて見たことがなかったものですから。父が流された時も、私が大怪我を負った時も、記憶の中の母は泣いていなかった。母は私に、「生きて」と言いました。海の仕事につかなくてもいい、学校も行かなくていい、何をしてもいい、だけれど、生きてくれと言いました。母はいつかこのような日が来ると分かっていたのでしょね。死ぬなどと言わなかった。ただ、繰り返し生きてくれと言いました。ざぶんと波音がひとつ跳ねた時に、私はすとんと理解しました。母は私に生きていて欲しいのだと、生きていてもいいのだと、自分は存在していてもいいのだと…。目と指を失い海に入る事ができなくても、母は私を愛しているのだと。その瞬間、手足の感覚が蘇り寒さに震えました。視界に月光と群青が鮮明に広がり、次第にぼやけていきました。私も泣きました。わんわんと大きな声をあげて泣きました。頬を伝う涙が熱かった。後にも先にもこれほど泣いた日はないです。私は生きようと思いました。母を抱きしめ返しながら、生きようと、強く思いましたね。

ふふ。ええ、本当の話ですよ。あの後家に帰り、寝ぼけ眼できょとりとこちらを見つめてくる弟を見てまた泣きました。久しぶりにまともに見る弟は可愛くて、なんだか愛おしくなったので

す。これからは兄の責務を果たそうと思いました。あの日は間違いなく私の人生を変えました。灰色一色だった故郷に、深い群青が加わりました。

それから私はひたすら勉強をしました。生きていくための武器が欲しかったんです。利き手を左手に変え、一心不乱に勉強に励みました。その頃、母は再婚し私たち家族は村を離れて関東に移り住んでいました。新しい父親は良い人でした。私の右目のことも指のことも受け入れ、勉強に励む私を応援してくれました。村に住んでいた時より暮らしは豊かになりました。今思い返せば、人生の中で一番穏やかな時間でしたね。もちろん、目や指のことで馬鹿にされたことは数多くあります。意地悪をされたことも。ですが、その度にあの群青を思い浮かべました。群青と母の言葉はいつでも私に力を与えてくれました。幸いな事に、私は物の覚えが良かった。勉強もすればするほど成績は伸びました。ありがたい事に中学校にも通わせてもらえました。

ええ、当時は誰もが中学校に通える訳では無かったです。お金に余裕のある家庭しか通えませんでした。私は本当に恵まれていました。弟はもっと優秀でしたよ。数年後、難関だった海軍兵学校に合格したのですから。それはそれは家族一同喜んだものです。ええ、大変名誉なことでしたから。私も弟が誇りでした。弟に負けず、私も頑張ろうと励みになりましたよ。

中学校卒業後、私は何度か仕事を変えながら知人のツテで代用教員として尋常小学校で働き始

めました。そこは山の麓にある田舎の農村でした。人口のほとんどの人が農家で、子ども的人数も五十に満たない小さな農村でしたが、とても穏やかで暖かい場所でした。村の人たちも優しく、目と手に障害がある私にも親切に接してくれました。嬉しかったですよ。新しい場所に行くたんびに嫌な顔をされる事が多かったものですから。受け入れられて嬉しかった。この村のために一生懸命に働こうと思いましたね。

ふふ、ええ、そうですね。この町の事です。だいが昔に合併されて村から町へと変わりましたけれど。この場所が、私が代用教員として働いていた村です。だいが景色は変わってしまったけれど、昔も今も同じ穏やかな所です。

代用教員としての仕事は私に合っていたように思います。給料は少なかったですが、子どもたちに勉強を教えることは楽しかった。働き始めて幾ばくか過ぎた頃、私はある少年と仲良くなりました。元気がよく、太陽みたいな子でした。顔や体が真っ黒になるまで外で遊びまわるので、私はその少年を「クロ」と呼んでいました。クロは良く笑う子でした。まあ面白い目をくしゃっと緩めるクロの笑い方が何処と無く弟に似ていたものですから、私はクロを可愛がりました。クロも私によく懐いてくれました。「先生、先生」と少し高い声で元気いっぱいに呼んでくれる事が嬉しかった。クロとの会話はいつも私を暖かい気持ちにさせてくれましたよ。クロは好奇心旺盛で色んな事を知りたがりました。自然の事から哲学、都会の流行のことまで何でも知りたがりま

した。今思えば、あの村に他所から来る人なんて稀だったものですから、外を知る良い機会だと思つたのでしょうね。クロは賢い子でした。難しい説明でも自分の中で噛み砕き、理解に結びつける。沢山の質問に対して私も知り得る限り答えました。

ええと、君にご兄弟は…。ああ、そうですね。その当時、私は弟と何年も会えてなかったのですが、似たクロが可愛くて仕方なかったのですよ。私たちの兄弟仲は良かったものですから。クロと接している間は家族を感じる事ができていつも懐かしさを感じていたものです。

クロと過ごす日常の中で、ある日クロは私の故郷について尋ねました。何気ない、いつもの会話の中で事でした。私は少し言葉に詰まりました。穏やかに暮らした関東の家のことを言えば良かったのかもしれませんが。しかし、「故郷」と聞いて思い浮かぶのは荒れ狂う灰色の世界と冷たい匂い、かつての父の背中と忘れられない群青ばかり。辛い記憶が多くても、やはりあの場所が私の故郷なのだと思感しましたね。私はクロに掻い摘んで故郷について話しました。冬がともも寒い事、小さな漁村である事、此処とは随分と雰囲気が違う事。クロは興味深そうに聞いていましたね。そしてクロはさらに私に尋ねました。海とはどんなものかと。この村は海からとても遠い場所にあったので、村の中で海を見た事がある人はほとんどいませんでしたから。クロもその一人で、話に出てきたまだ見ぬ海について聞きたがりました。私はしばらく考えて、「群青」と答えました。一般的に答えれば良かったのだと思います。青くて、広くて、しょっぱい。です

が、クロにはあの私の心を動かした情景を知ってほしいと思ったのです。その時期、クロは進学という夢を諦めなければいけませんでした。クロは農家の三男坊で、進学にお金が出せるほど裕福な家ではなかったですから。もっともっと学びたい事があったでしょうにね。クロはいつもと変わらずに笑っていましたが、やはり悔しかったのだと思います。心なしか少し元気がない姿に、漁師という夢を諦めたかつての自分を重ねました。私はクロにあの日の情景を懇切丁寧に伝えました。世界には人生を一変するような景色があるのだと知って欲しかった。心奪われる一瞬がある事を。そしてそれは、何時迄も心に残り続ける宝物になると。これから先、この少年にそのような出会いがあると願いながら伝えました。クロは私の話を静かに聞いていました。話し終えた後も、クロはしばらく考え込んでいました。そして一言、「見てみたい」と呟いたのです。私の胸に激情が込み上げましたね。あの、いつも明るい太陽みたいな子がそれは静かに、そして切実にぼつりと呟くものですから。私は、見せてあげたいと強く思いましたよ。あの群青を、夢を断たれたこの少年に。ですが、当時の私はクロにいつか一緒に見に行こうと返事をするので精一杯でした。それでも、クロは嬉しそうに頷きました。その数日後に、クロが養子に出されたと噂で聞きました。クロは一言もその話を私にはしていませんでした。私はしばらく落ち込みましたよ。仕方がないとは分かかっていても、あの笑顔や、先生と私を呼ぶ声がもう聞こえないと思うと寂しかったです。

ふう。この後は戦争の色が濃い時代になりましたね。私の後悔の始まりです。段々と戦況が激

しくなつて行くにつれて学校は変わっていききました。国民学校へと名前が変わり、私は教員として子どもたちに忠君愛国を指導しました。それが責務だと思つていたのです。私のこの身体でも、国に、ひいては海軍で国のために命をかけている弟に貢献できると意気込んだものです。…ええ。当時はそれが正しいと、立派な事だと、本当に信じていましたよ。

…雨音が激しくなってきましたね。寒くはないですか？ああ、それなら良かった。温かいお茶の一つでも出せればいいのですが。…こんな激しい雨の日は、また別の記憶が強く蘇ります。

ある日私に一通の知らせが届きました。母からでした。…弟の戦死を伝えるものでした。その日はとにかく雨がひどくて、遠くで雷がかすかに鳴いている音が聞こえていました。私は雨音が響く暗い室内で立ち尽くしました。信じられなかった。いや。頭では理解していたのですよ。弟は軍人。お国のために命を賭す事が使命であると。いつかこんな日が来ることもあると。だが、私は自分の家族をまた失つた事実が信じられなかった。心のどこかで弟は死なないと思つていたのです。弟の死が名誉だと喜べなかった。弟が死んで、私は悲しかった。すごく、悲しかったんです。私には国よりも弟の命が大切だったと、ようやくと気付いたんです。忠君愛国を説く教員である私が。

可笑しいですよ。本当に。よく考えてみれば日常に死が潜んでいたのにね。同僚の教師に赤

紙が来ていた事を知っていたのに。下宿の息子さんが戦死したのを知っていたのに。都市部で空襲が相次いでいるのを知っていたのに。私は本当に大馬鹿者でした。この身体でも国に貢献できると、周りに証明したいだけだったんです。浅はかでした。たった一人の弟の戦死を聞いて初めて、戦争というものを真に理解した気がしました。私が子どもたちに説いている忠君愛国は、人の命よりも大切なのだろうかと初めて疑問を抱きました。苦しかったですよ。今までろくに考えもせず、盲信的に教育という名を振りかざしていた自分が情けなかった。私は知っていた筈でしたのにね。大切な人が、死ぬということ。それがどんなに、どんなに。弟は海で亡くなったそうです。父だけでなく、弟まで海に飲み込まれてしまった。私は今まで鮮明に広がっていた群青が霞んでいくように感じましたよ。

…ええ、雨の音を聞くと弟のことを思い出します。よく出来た弟でした。私には勿体無いくらい。出来ない兄を馬鹿にすることなく慕ってくれました。実は弟が海軍を選んだ時、私は少しだけ嬉しかったんです。弟の心の中にも故郷の海があるのかもしれないと思って。私は、弟と共通しているものがあると知って喜んだんですよ。そして、弟が戦死して幾ばくか過ぎた頃にこの国は終戦を迎えました。

戦後、またしても私は空っぽになりました。自分が正しいと信じてきた事が間違이었다と気付いてしまいましたからね。やるせない心を抱えながら毎日を過ごしていました。関東の両親は

無事でした。それでも私は会いに行きませんでした。：行けませんでした。薄情かもしれませんが、なんとなく弟に顔向けできなくて、線香をあげに行くことすらしませんでした。私は貧しい生活を送りました。誰もがそうでした。しかし私にとっては、却ってそれが良かったのかもしれない。毎日生きて行くことに必死で、空っぽの心も紛らわせることができましたから。

それから二年程過ぎた頃でしょうか。私に手紙が届きました。クロからでした。今でも内容を覚えています。お元気ですか、と私の身を案じる文から始まり、クロの近況が綴っていました。空襲を経験した事。何とか生きています。仕事を見つけて、やっと落ち着いて暮らせるようになって。事。実直な文字で丁寧に書かれていました。そして、最近初めて海を見たと言っていました。海を見て、先生を思い出したと。実際に見た海は、先生が言うほど心動かすものではなかったと、書かれていました。それから、お身体に気をつけて、と括られています。

私は居ても立っても居られなくなりました。クロに会いたいと思いました。クロに会って、弟に似ているあの笑った顔が見たかった。私は急いで荷物をまとめ、汽車に乗り込みました。クロの手紙には勤め先は書いていませんでしたが、住所を元に探しました。久しぶりに前を向いて走った気がしましたね。顔を上げて、思ったよりも明るい世界に驚きました。クロを探すうちに、苦しい生活の中でも懸命に生きる人たちを目にしました。子どもの笑う声を久しぶりに聴きました。空の青さが目に染みしました。ですが、結局クロに会うことはできませんでした。失意の中、何気

なく手紙の裏を見ると、小さな文字で書かれた文章を見つけました。

『先生、一人前になったら、また会いに行きます』

私は思わず笑ってしまいましたよ。そうか、そうか。また私に会いに来てくれるのかと。大人になった姿を見せにきてくれるのかと。一人前になった姿を見てほしいのならば、今は会うべきではないのだろうと思いましたね。私は心の中で何度もクロに呼びかけましたよ。君を信じるよと。私も一人前になる君に恥じないように生きると。また、会いましょうと。私は村に戻りクロに返事を書きました。「会いに来るのを楽しみに待っています」と、ただ一文だけ書きました。その後、クロから手紙が来ることはありませんでした。私も送りませんでした。

それから私は懸命に生きましたよ。正規の教員免許をとり、もう二度と後悔のないよう、真摯に子どもたちに向き合いました。教育とは何か、自分なりに考え続けた人生だったと思います。一人前になったクロと会うときに、釣り合う自分であるよう背筋を伸ばして過ごしました。：随分と時間が経った後ですが、弟に線香をあげに行くこともできました。写真の中の弟は凛々しく、それでいて記憶に変わらない眼差しをしていましたよ。長い間、変な意地を張らずに直ぐに会いに来ればよかったと後悔しましたね。母は私に特に何も言いませんでした。やっぱり、母はすごいですね。私の思いを分かっていたのでしょう。ただ、優しく微笑んでいましたね。

故郷の海にはあれから一度も帰りませんでした。今度帰るときは、クロと一緒に決めていましたから。それに、私の中の群青はまた鮮やかに蘇りましたからね。臉を閉じればいつでもあの情景に会える事ができました。この群青があれば、私はどんな事も頑張る事が出来たんですよ。思えば、海は私から父を奪い、目と指と夢を奪い、弟さえも飲み込んだ。けれど、どうしても嫌になれなかった。憎めなかった。私にとってこの世で見た一番美しい景色もまた、海でしたから。

あれから、気付いたら半世紀以上の時が過ぎました。結局、嫁をもらう事もせず、家族をつくらず一人でこの歳まで生きてきました。もう目も見えず、ろくに身体も動きません。ほんと、長い時が経った。時代は大きく変わりましたねえ。まさかこんな世の中になるとは、あの頃の私は思ってもみなかった。できれば弟にも見せてやりたかったですよ。

この地に戻ってきたのは、やはりクロの手紙の影響でしょうね。一度この場所を離れましたが、教師を退職してからは戻ってきました。「また会いに行きます」この一文を心のどこかで信じていました。もし、また会えたのなら今度こそ、故郷につれて行ってあの群青を見せてやろうと思っていました。

∴。

∴。

今朝、私の元に人が訪ねてきました。クロの妻だと名乗る人でした。

クロが亡くなった事を伝えてくれました。

遺品整理の時に、私宛の手紙が出てきたそうです。送られなかったたくさんの手紙が。その中に一通、私からクロへ送った手紙があったそうです。その住所を元に訪ねてきてくださいました。

クロの奥さんは、クロが書いた私宛の手紙を持ってきてくださいました。手紙を見つけた時、私に届けなければいけないと使命感が湧いたそうです。

書いては、まだ出すべきじゃないと葛藤したのでしょかね。こんなに沢山∴。別に、ふっと会いに来てくれるだけで良かったのに。本心では、一人前になろうがなくてなからうが、どんな姿になっても良いから、会いに来て欲しかった。結局、私の記憶にある彼の姿は少年のまま変わらずじまいですよ。

私からクロへと送った手紙はくしゃくしゃで、何度も読んだ跡があったと教えてくれました。たった一文の手紙を大切にしてくれていたと知って、ぐっと胸にくるものがありました。

ありがたいですよ。私が生きているかも、この町にいるかも分らなかったでしょうに。よく、訪ねてくださいました。

本当に、ありがたい。

この手紙たちはもう読むことはできませんが、あの世で本人に読んでもらう事とします。ふふ、いいでしょう？

ああ、楽しみだなあ。

本当に今日は不思議な日です。不思議で、とても素敵な日だ。私に会いにきてくれた。こんな嬉しいことはない。長い間生きていましたが、今日が一番嬉しい日だ。

長い間生きていて良かった。待っていて良かった。

懐かしい匂いのお客さん。会いにきてくれて、話を聞いてくれてどうもありがとう。

ああ、とても良い気分だよ。今夜は素敵な夢を見るだろう。それは、おそらくあの群青だ。あの群青に会えると思うんだ。

きっと、私の隣には少年がいるはずだよ。

君も、そう思うでしょう？

ああ、なんだか、眠くなってきたなあ。

こんな穏やかな気持ちで眠るのは久しぶりだ。

お客さん、私はそろそろ眠ることにするよ。

では、また会いましょう。

おやすみ。

(文学部総合人間学科四年)

傷口

今仁 恵林

牛脂も貰ったし、パン粉もこの前買ったのを置いてるからもう買い忘れたものはないはず。私はユーチューブで何度も見返したレシピ動画を脳内で再生しながら、スーパーを出た。自動ドアを抜けるとむわっと熱い空気が体にまとわりついてくる。小走りで駐輪場へと向かい、買い物袋をかごに入れて、自転車に乗る。北村さんの家がスーパーから近くて良かったと、付き合い始めてからも何回感じただろうか。暑いなあと思いつつながら自転車を三分ほど漕いでいると、いつの間にか北村さんの家に着いている。北村さんのアパートは、学生専用とかじゃなくて一般の人も住んでいるアパートだから、一人暮らしのおじいちゃんとかおばあちゃんも住んでいる。北村さんの研究室の先輩と、部活の後輩もこのアパートに住んでいるらしいけど、私はおじいちゃんかおばあちゃんとしかまだすれ違ったことがない。

そんなメモリアルハイツの駐輪場は、いつも網戸でテレビの音が丸聞こえのおばあちゃんの部屋の前にある。前に自転車の止め方について注意されたことがあるらしいので、倒れないようにきちんと並列して自転車を止める。階段を上がってすぐの、203号室が北村さんの部屋。よく

わかんないご老人の方たちが住んでるし、オートロックじゃないし、築三十年だし狭いしスーパ―が近いことくらいしかいいところが無いけれど、私は北村さんの家ということだけで、このメモリアルハイツに住みたいと思うくらい大好きだ。

合鍵で、少しだけ期待を込めながらドアを開けるけど、やっぱり北村さんはまだ帰っていないかった。私は文学部だからよくわからないけど、北村さんは薬学部だから、三年生になってから毎日研究室があって、忙しい日々を送っている。リュックのサイドポケットからスマホを取り出してつてみると、まだ十七時半だった。北村さんからは何も連絡が来ないし、今日も多分いつも通り帰るのは二十時ごろになるんだろう。買い物袋からひき肉と卵とレタスを取り出して、冷蔵庫に入れる。四日前に来た時から冷蔵庫の中身が変わっていなくて、またセブンはほっともつとで済ませたんだろうと察してしまう。本当に、私がいないと不健康になりそう。

ばんへあゝ早く帰ってこないかな〜!!!〜

ばんへハンバーグうまく焼けるといいなおいしいって言ってくれるといいな元カノのよりおいしいといいな

ばんへいや元カノのよりは絶対においしい自信ある〜

「ばん」という名前でツイッターを始めたのは、たしか去年の夏くらいだった気がする。このアカウントは、友だち数人からフォローされているだけの鍵垢だ。アニメの情報を追うために高校生の時からツイッターはやっていただけで、こんなに頻繁にツイートをするアカウントは持っ

ていなかった。

北村さんと付き合い始めてから、ツイート数が格段に増えた。それまでも授業とかバイトの愚痴とか、どうでもいいことをたまに呟いてたけど、ヒートアップするときには特に、北村さんのことは気持ちぶつける場所として百四十字めいっばい使って書いて、その後にも連投ツイートをくらくらくさん呟いていた。文脈がめちゃくちゃでも、文字にするだけで自分の気持ちを整理できている気がしたし、友だちに直接話すとのろけみたいでうざいようなことも気軽に書き込めてしまった。

ツイッターと課題を歩き来していると、いつのまにか一時間が経っていた。そろそろ用意し始めなきゃなと思い、パソコンを閉じて準備に取り掛かる。

この前使ってそのままになっていた炊飯器の釜を取り出して、シンクに置く。蛇口を捻って、ぬるま湯をかけながらしゃもじでごりごりと釜の内側にこびりついてしまったご飯粒をこそぐ。この家の蛇口の温度は、調整するのが難しい。冷たいなど思ってお湯を増やすと急に熱くなるし、北村さんにも、危ないから気を付けてねと私が洗う物をするたびに言われている。でも、水温の調節ができなくても、ワンルームでリビングとキッチンに仕切りがなくても、IHも一台しか置けないキッチンだけど、自分の家のキッチンよりも何倍も楽しく料理ができる。

釜を洗い終わったので、シンク下にある収納スペースからお米を取り出す。もうすぐ無くなりそうだから、今度来るときは確認しておかないとな、と思いながら三合分のお米を計る。お米を研いで、炊飯器にセットする。時間を確認するとまだ余裕はありそうだったけど、保険をかけて

早炊きのスイッチを押した。

北村さんの好きな食べ物ハンバーグだと聞いてから、色んなレシピを調べて試した。元々料理は好きな方だったので、その好きなことで好きな人にもっと好きになってもらえるなんて、嬉しくて仕方がなかった。

スマホを開いて今期のアニソンメドレーを再生しながら、メモアプリを開いて材料の確認をする。ひき肉玉ねぎパン粉牛乳たまご。ナツメグと塩胡椒もある。すべてがそろっていることを確認してから、料理を始める。

玉ねぎはみじん切りにして、あめ色になるまで炒める。正直、レンジでチンしてフライパンであめ色にしても、ハンバーグに入れてしまえば私はあまり味の違いが分からないけど、北村さんがあめ色玉ねぎが好きだと言っていたので練習した。IHを使い慣れてないせいで火加減が難しかったけど、なんとか家で練習したとおりうまくできたので安心する。あめ色玉ねぎは別の容器に移して、冷凍庫で冷やす。玉ねぎが温かい状態でひき肉と混ぜてしまうと、脂が溶けてパサパサになってしまうのだ。本当は粗熱が取れてから冷蔵庫に入れて冷やす方がいいんだけど、思ったよりも時間がかかってしまったので仕方がない。玉ねぎを冷やしている間に、パン粉とたまごを牛乳を混ぜて、先につなぎを作っておく。まだ玉ねぎは温かったので、この前肉じゃがを作ったときの余りの人参とじゃがいもを一口サイズに切って、付け合わせの野菜を作る。調味料と野菜を器に入れてレンジで加熱する。火が通っていることを確認して洗った物をしていううちに、玉ねぎはもう完全に冷めていた。冷蔵庫からひき肉を取り出し、ボウルに入れて塩と胡椒を

振る。北村さんが好きだと言っていたので、ナツメグは多めに入れる。ゴム手袋をつけてからひき肉に粘り気が出るまで手の熱が伝わらないように素早く混ぜる。つなぎと玉ねぎを入れて混ぜ、四等分にする。手にサラダ油をつけて、表面にひび割れができないように意識してまるめる。

丁度四つ目を丸め終わったところで、インターホンが鳴った。北村さんだ。私はすぐに手袋を外し、玄関に行き鍵を開ける。

「おかえり。ごめんまだご飯できてない」

「ただいま。全然いいよ」

靴を脱いで玄関に上がるのを見届けてから、北村さんのマスクを顎にかける。

「えりかちゃん？どうしたの？」

「……わかってますよね」

北村さんは嬉しそうに私の頬に手を添えて、軽く唇を重ねた。私は頬に添えられた北村さんの手を取り、その手で自分の顔を覆い隠す。

「自分からせがんできたのに恥ずかしがってるの？」

「別に、マスク外してあげただけでそっちが勝手にキスしてきたんですよ」

「はいはい」

北村さんが満足そうに笑う。もう付き合って三か月も経ってキスなんか数えられないくらいしてるのに、今更恥ずかしがるわけじゃないじゃん。勉強できるくせに馬鹿だよなあと、いつも思う。でも私は、北村さんのそういう他人の言動を素直に受け取るところが好きだし、北村さんも純情

な女が好きっぽいから何も不都合はない。私はキッチンへ戻ると、さっきまで流していたアニソンを止めて、北村さん用のプレイリストを流してから料理を再開する。

「え、今日ハンバーグ？」

「そうですよ。あと焼くだけです」

部屋着に着替えた北村さんが、キッチンの方にやってきた。

「何か手伝うことある？」

「いや、大丈夫です」

そう伝えると、北村さんはキッチンから離れ、テレビをつけてからスマホゲームを始めた。シンクに洗い物が溜まっていたけど、後でまとめて洗えばいいかと思って北村さんには頼まなかった。

私は流していた音楽を止めてから、レシピの確認をする。フライパンからはジュワジュワと音が鳴り、肉の焼けるにおいがした。早く食べた反応が見たいなあ。

北村さんは、私の「推し」だった。

北村さんと初めて出会ったのは、ちょうど一年くらい前、大学一年生の八月だった。私たちは、高級食パン専門店「これは私の成果」のオーブンングスタッフで、今もアルバイトを続けている。最近はずっと増えてきたけど、一番最初は大学生が私と北村さんの二人しかいなかった。だから

ら、私たちは同じ大学という以外ではほとんど共通点がなかったけれど、自然と仲良くなった。その頃、北村さんは掛け持ちで塾のアルバイトもしていたから、私よりシフトに入る日数も時間も少ないのに、仕事を覚えるのがとても早かった。私より先にパン生地を両手でこねられるようになったし、やり方を丁寧に教えてくれた。人当たりも良くて、器用で優しく、人間としてすごくいいなと思った。今思えば、「推し」じゃなくて「ちょっと気になる人」と言った方が世間的には正しかったのかもしれない。

私は、北村さんと付き合うまで三次元の男性に対して恋愛感情を抱いたことがなかった。物心ついた時からずっとアニメや乙女ゲームが大好きで、二次元の男性キャラクターに恋するいわゆる夢女子だった。だから、オシヤレだったけどよく見たら全然イケメンじゃないし、タイプじゃないし、もしかしたら好きなのかも、なんて一ミリも考えなかった。実際、北村さんから彼女が来た、という話を聞いても、「え、その感じで年上の彼女いるんだ。推せる」としか思わなかった。

北村さんの彼女は、他県にある「これは私の成果」本店の店長だった。名前を絵里と言った。絵里はオープン日から一週間、ヘルプで私たちの店舗に来ていた。北村さんはその一週間毎日シフトに入っていて、そこで仲良くなった様だった。私は最初の一日しかシフトに入っていないから、絵里とは少ししか話さなかったけれど、確かに男ウケがよさそうな女だった。背が低くて童顔で、人によってはかわいく見えるくらいのブス。サバサバしてる雰囲気を出しながらも甘い感じで話しかけてくる。後で二十七歳だと知って驚いた。

オーブンから約一か月後、十月の上旬くらいに、北村さんから、

「新しくこと同じ系列のパン屋ができるの知ってる？『目からうろこです』っていうところなだけで。今度行くからお土産買ってこようか？」

と、聞かれた。うちの系列店は奇をてらいすぎた店舗名ばかりだけど、特に変わってるなど思ったのでその店のことは知っていた。でも、北村さんはパンよりご飯派だと言っていたし、なんでわざわざ車で一時間以上もかかるような新店舗に行くんだろうと思って話を聞いてみると「本店の店長に誘われたから」とのことだった。仲良しですねと返すと、

「なんかインスタやってる？って聞かれたからやってますよって言ったらその場で検索しはじめてフォローされて、そこからずっとDMしててそんな話になったんだよねー」

と言っていた。なるほど、世の明るい大学生はこうやって恋人を作っていくんだなと思った。「え、それ絶対狙われてるじゃないですか。ていうか出会って一か月くらいしかたってない人とドライブデートってすごくないですか」と茶化したかったけど、北村さんが余りにも、今度友達と遊びに行くんだみたいなテンションで話すので私は何も言えなかった。

それから一か月後、まんまと二人は付き合っていた。最初に話を聞いた時は「推せる〜」と思っていたけど、絵里とシフトが被っていた人に話を聞くと、仕事をさぼってばかりだったとか、ずっと北村さんの近くについて話してばかりだったとか言っていて、少し幻滅してしばらく推すのをやめていた。北村さんは楽しそうに「彼女の誕生日プレゼントにあげるネックレス、40センチと45センチどっちがいいかな」と、私に相談してきたりした。どっちでもいいわと思いつつも、「好

きな服の系統によるんじゃないですかねえ」と真面目に考えてあげていた。それから三か月後、北村さんは本店の店長に振られた。そしてその二か月後、私に告白して、私たちは付き合い始めた。

「夏休み、どうする？」

北村さんの期末テストもひと段落して、私たちは一週間振りに会っていた。北村さんの家から徒歩一分の所にある小さな喫茶店で、私はマスカットのパフェを、北村さんはチーズケーキを食べていた。

「どうって、何がですか？」

「どこか行きたいところ無い？旅行行こうよ、せっかくだし泊まりで」

北村さんはすぐアウトドアだ。月に一回はレンタカーを借りて友だちと遠出をしていて、運転も上手だ。

「行きたい！えー、めっちゃ楽しみです」

まだどこに行くかも決めてないのに。北村さんが笑いなから言う。旅行は人並みに好きだけど、インドアな私にとってはそこまで心を踊らされるイベントではなかった。

でも、北村さんとは別だ。もちろん、こうやって近くの喫茶店で季節のパフェを食べて、秋にはモンブランが出るかな、楽しみだね、なんて話すのもすごく幸せだ。だけど、旅行に行って、

たくさん写真を撮って、LINEのトークアルバムがひとつずつ増えるのが、北村さんとの思い出を目に見えて残せて、これからどんどん増えていくんだろうなと想像するのが何よりも好きだ。あと、北村さんが運転する姿を見るのも好きだし、告白されたのも車の中だったから、助手席に乗るとそれだけで甘酸っぱい気持ちになれた。

「来年は多分えりかちゃんもインターンとかで忙しいだろうし、俺も試験あるからなあ。今のうちに色々行きたいね」

来年。北村さんの未来に当たり前に私がいることが嬉しい。北村さんは今三年生で、薬学部は四年生の冬、五年生に進級するために試験があるらしい。その頃は私も大学三年生の冬で、きつと就活とかで忙しくなるはずだ。一週間会えないだけで、三時間LINEが返ってこないだけで寂しいと思ってしまうのに、まだ先のことではあるけれどその時期を乗り越えられるのか、正直不安に思う。でも北村さんが当たり前に私と来年のことを考えてくれたことで、その不安は吹き飛んだ。北村さんは、あまり口に出して好きだとか、かわいいとか言わない。それを悲しく思うこともあるけど、だからこそこういうふとした時に、北村さんの人生の中に私がいることを知れて嬉しくなる。

「北村さん頭いいんだから、試験なんて絶対大丈夫ですよ。あー、インターンとか考えたくないなあ」

「いや、最近はそうでもないから」

いつもそういうけれど、本当に北村さんは頭がよくて、器用だ。薬学部に入るために一年浪人

したらしいけど、浪人してる時も適度に息抜きしながら勉強してたから全然苦痛じゃなかったと言っていたし、私とは正反対だなとつくづく思う。小学校のころからバレエをしていて大学まで続けて、勉強も運動もできてその上優しくておしゃれで、もう推す要素しかない。

「えりかちゃんは、どこに就職しようか考えてるの？」

「え。うーん……。まだ正直全然考えてないです」

付き合ってからまだ一週間にも聞かれたことがある。正直東京に住んでみたい気持ちはあったけど、それを正直に言うとは確実に一年間は遠距離になるし、北村さんの就職先によってはずっと離れ離れになってしまうから、あまり考えたくないことだった。

付き合い合ってからまだ一週間くらいしか経っていないとき、私は友だちから聞いた心理テストを北村さんに試したことがある。あれは確か、スーパーに買い物をしに行く途中だった。

「ねえねえ、好きなタイプ三つ言ってください」

「え？なに急に」

「いいからいいから」

「うーん……。純粹で、笑顔がかわいくて、よく話してくれる人かな」

「じゃあ、あともうひとつ言ってください」

「えー、えっと……」

北村さんは少し悩んで、こう答えた。

「一緒にいて、先が見える人、かなあ」

「……へー」

この心理テストは、四つ目に答えたタイプが一番自分が求めている要素だ、というものだった。「なんか照れてない？ どういうこと？」

「いや、照れてないです。これ心理テストで、一番最後に言った好きなタイプが、好きになる人に対して自分が一番求めている要素らしいですよ」

「あ、そうなんだ。まあ確かにあってるかも」

「私、先見えたんですか？」

そう聞くと、北村さんは困ったように、恥ずかしそうにしながら笑っていた。

「そうかもね、親に紹介するところまでは想像したし」

意外だった。その頃の私は、まだ今ほど強く「好き」を意識できていなかったけれど、それでも、その意外さでじんわりと、深い幸せを感じることができた。

今だってこうやって就職先を聞いてくるのは、北村さんはあまり口に出すタイプじゃないからわかりにくいけど、私との先を見てくれているからなんだろうなと思う。

「まあまだ二年生だしね。それよりこれ、おいしそうじゃない？ 海鮮丼なんだけど……」

北村さんはこういう美味しいご飯とか、おしゃれなお店を見つけるのが得意だ。私に無いものをたくさん持っている。

「また他のところも見てみるね」

北村さんはまたインスタのおすすめ投稿を散策し始めた。私は、器の底に一粒だけ残しておいたマスカットをフォークで刺して口に運ぶ。爽やかな甘さが、口の中ではじけた。

窓の外を見ると、夕方なのにまるで正午かのように空は青く、アスファルトがじりじりと照らされていた。こんなにも夏を輝かしく感じられる日が来るとは、思っていなかった。

*

正直、海鮮井とか自然の景色とかそこまで興味がなかった。あの夏は特に食欲が無かったし。多分、それまでの十九年間一切使ってこなかった部分の精神を摩耗したせい。でも私はそれでよかったんだ。いや良くなかったからこうなってるんだろうけどでも私は幸せだった。だって気づいていなかったから。もっと本当の幸せが友だちからうらやましいと思われるような幸せがあったはずなのに私は気がついていなかったからそれが最大級の幸せだと思ってたんだ。怖い。怖いはずなのに戻りたい。今は教訓にして頑張ればもっと幸せになれるかもしれないのに気づかない幸せが欲しいもう無理だけど。海鮮井食べたい。裸眼が少し大きく見えるようなカラコンじゃなくってちゅるん系の14・5ミリくらいのカラコンつけてアンクルージュのワンピース着て友だちとスイーツビュッフェに行く私の方が私は好きだよ。でも少し色素が薄くなるくらいのカラコンで髪型は短めのボブで髪色はアッシュ系でジーユーのセットアップ着て想像力が及ばない彼氏の隣で海鮮丼食べて連れていってくれてありがとうってストーリーに載せる頭が幸せな女になりた

い絶対その女つままないのにね。

*

ばんへ最近なんか尽くしすぎて、私ばっか好きじゃんって思ってしまうへ

ばんへこの前旅行行ったときの写真見返したら私がひとりで映ってる写真一枚も無かったし…
ばんへ写真撮るのも手の込んだご飯作るのも部屋片づけたりするのも全部私が好きでやってることなのにこんなこと思っちゃうのマジで嫌。自分クソすぎるへ

じわじわと涙がこみあげてきて、ツイッターを閉じた。北村さんは隣で小さいびきをかきながら、壁側を向いて寝ている。こんなに近くにいるのに、どうしてこんなに悲しい気持ちなんだろう。健康に生きてくれて、隣で寝られるだけで愛おしくて幸せなのにどうしてこんなに欲張ってしまうんだろう。

これもツイートしよ、と違ってツイッターを開く。TLを見ると、おいもがへばんはクソなんかじゃないよ〜!と呟いていた。おいもは、私の中学からの唯一の友達だ。へありがとおいもだいすきと呟くと、すぐにいいねが来た。やっぱりもうツイートするのはやめておこうと思っ

た。
最近、悪いことばかり考え込んでしまう。私ばかり好きだとか時間を捧げるとか、そんな風に思ってしまう。北村さんは授業も対面であるし、勉強だって忙しいし、研究もあるし、仕方が

ない。そうわかってはいるはずなのに。

いくら「押し」と言っても、私たちは付き合ってるんだから対等なはずだ。でも、正直私が彼氏のことを勝手に推してるだけで、分かりやすく時間やお金を捧げて愛を表現してるだけなのに、相手にも尽くした分を要求することはなんか違うことはちゃんと理解できてるつもりだ。「押し」が乙ゲーのキャラクターだったら、時間を割いた分だけレベルが上がってボイスが解放されたりするし、課金した分だけ私の手元に来てくれる確率も上がる。けど私が生きてる世界は三次元の現実で、北村さんは乙女ゲームのキャラクターでもなんでもないただのリアルな人間。私が尽くしていることに必ず気がついてくれるわけでもないし、欲しい言葉をかけてくれるわけでもない。むしろ、北村さんからしてみれば私の愛は負担になっている気がする。

多分、北村さんは「重いな」と思いつつもそれを改善しようとは思わない。私に「負担になるからそこまでしなくていいよ」とも言わないし、「俺は全然返せてないな」とかも思わない。私と同じ分の時間やお金を捧げてくれなくてもいいから、こうやって私が考えていることを知ってほしい。私みたいに考えろなんて言わないから、私が今、北村さんと一緒に生きていくためには、ここまで考えなきゃいけない不器用な人間であることを分かってほしい。そうじゃないと、関係を維持する努力が、絶対に釣り合っていない。

でもその努力を相手に強いるようなことはしないし、何より私は、私みたいになんか考えるよりも、北村さんみたいに考え込まない前向きな性格が好きだ。それに、北村さんが何もしてくれないわけじゃない。遊びに行くときはレンタカーの予約も運転もしてくれるし、いい感じのお

店も見つけてくれる。私がこの状況に慣れてしまっただけなんだ。私はスマホを充電器にさして、北村さんの背中に抱き着くようにして首筋に顔をうずめた。私は北村さんのおいが大好きだ。北村さんが少しうなりながら、こちらに体を向けて、私を抱きしめてくれた。なにも、考えなくていい気がした。

「いや、それはないわ」

山田さんは手に持っていたボールペンをメモ用紙に強くたたきつけた。芯を出したままだったので、メモ用紙には小さなへこみができていた。

平日のお昼過ぎ、オープンしてから一年と三か月が経つ。「これは私の成果」は、オープン直後の人だかりが想像できないほど、静まり返っていた。

山田さんは私たちと同じオープンングスタッフで、北村さんと同じ年のフリーターだ。根っからの腐女子で、その上噂話も大好きなので、二人でレジにいる時はひたすら喋っていた。シフトが被ることが多いのもあって、バイト先の人で唯一私たちの関係を知っている人でもあった。

今日も山田さんと二人でレジに入っていたけど、お客さんも少なく今日売る分のパンも全て包み終わっていたので、私たちは適当に細かな業務をこなしながら最近買ったBL漫画が当たりだったとか、店長のおじさん構文LINEがキモいだとか、いつものように色んな話をしていった。

山田さんのメモ用紙がへこんでしまったのは、「北村さんが女友だちと二人で、スタバでテス

ト勉強するのが気になる」という私のちょっとした愚痴のせいだ。

「テスト勉強くらい、家でひとりやればよくない？ わざわざ女友だちとスタバでやんなくていいでしょ」

「いや、でもその友だちは薬学部に一位で入学した人で、北村さんは二位で入学したから二人ともすごい頭いいんですよ。だから二人にしかわからないことがあるだろうし、あんまり口出せないんですよね」

ふたりにしかわからないこと。自分で言ったくせにずきんと心が痛んだ。

「へー、北村くんってそんなに頭いいんだ。まあなんかそんな感じはするけど」

「しかも北村さんは推しでもあるんで、恋愛対象じゃない女と二人でスタバに行けるっていうところは推しポイントになっちゃうんですよね。自分じゃ考えられないんで」

「それがわかんないんだよね。自分だったら行けないってのはわかるけど、推しポイントにはならないわ」

「あはは。人それぞれですからね」

「しかも、えりかちゃんの写真全然撮らないんでしょ？ 私がえりかちゃんの彼氏だったら絶対撮りまくるし、やってる限りのSNSに載せまくって自慢するわ。北村くんも罪な男だよねえ」

ま、えりかちゃんが楽しいならいいんだけどね、と言って山田さんは最近ハマった推しカプの話をし始めた。

別に、自分よりかわいい子なんて世の中にたくさんいるけど、二十年も生きてきたら流石に自

分の容姿が人からどれくらい評価されるものなのかくらい分かった。中学生の頃、吹奏楽部の後輩から「えりか先輩って、おじいちゃんがフランス人で、家ではフランス語を話してて二才からフルートを習ってたって聞いたんですけど、本当ですか？」と聞かれたことがある。うちの家系は純日本人だし勿論日本語しか話せない。フルートは中学に入って初めて部活で吹いたし、田舎で流れる噂は怖いなと思った。高校生の頃、一度も話したことがない、名前も知らないような男子から好意を持たれることが何度かあった。最初の方は、素直に嬉しかったし、申し訳ないなと思いつながら告白を断っていた。中学生までは元々の遺伝子で勝負してる感じがあるけど、高校生にもなればみんな垢抜け始めるし、人も増えるから必然的にかわいい子も増える。今思い返せば本当に幼かったけど、自分は相当顔が可愛い部類に入ると思っていた。

でもだんだん嬉しさは消えていって、むしろ嫌悪感を抱くようになった。私が乙女ゲームに課金してることもツイッターのアカウントが七個あることも知らないくせに、顔と勝手に作り上げたイメージだけで好きになる神経が分からないと思っていた。同時に、ああ、私ってこの程度の人に「いける」と思われる程度の可愛さなんだな、と分かって、自分のことまで疎ましくなっていた。

大学に入るまでは仲のいい男子がいないうような生活を送っていたこともあるけど、北村さんは初めて、私の根暗な部分とか、オタクな所を知ったうえで好意を持ってくれた人だった。自分の容姿以外をきちんと好きになってくれたところが嬉しかったはずなのに、異性に対して自分に自信が持てるところが容姿しかないせいで、北村さんにいやな思いをさせてしまっている。

こんなことで一人で悩む自分が馬鹿らしい。

目を輝かせて、息を荒くしながら推しカブについて語る山田さんを見ると、オタクだった頃の方が、自信を持って楽しかったなって言えたなあと思ってしまう。

私は今、楽しいんだろうか。

この間、北村さんと初めて大きなけんかをした。その日は北村さんがまた実験があって帰りが遅くなる日だったので、いつものように夕食を作っていると、北村さんからLINEがきた。

「先輩からご飯誘われたから、食べてから帰るね。多分、一時間後くらいになると思う」

私は適当に了解ですという旨のスタンプを送って、作りかけのカニクリームコロッケのタネを見つめた。私の夜ご飯どうしようかなと思っただけ、なんだか食欲がなくなったのでタネはボウルに入れたまま、ラップをして冷蔵庫にしまった。

ばんへ別に、ご飯作って待ってるねとか言っただけでなかったし、北村さんが全面的に悪いわけじゃない。でも北村さんと付き合ってから半年以上、ほとんどこうやって過ごしてきたのに、私がご飯作ってるのか思わなかったのかな

ばんへ私だっただけで連絡しておこうとは思っただけ、でもいつも私ばかり連絡してるし、うざいかなとか気にして連絡しなかったんだよね。結局もっとうざい感じになってるけど(笑)

ばんへマジでほんとに私のどこが好きなんだろうてかほんとに好きなのかな〜(笑)

ひたすらツイートして、北村さんが帰ってくるまでに冷静になっておこうと思ったけど、ダメだった。

自分では普通に振る舞っているつもりだったけど、「怒ってる？」と聞かれてしまった。「怒ってないよ」と答えたけど、「怒ってるじゃん。話してよ」と問い詰められて、結局言いたくないことまで言ってしまった。もっとどうでもいいこととかも連絡してほしいとか、写真全然撮ってくれないとか、関係ないことまで持ち出して怒るのがよくないことだとわかりながらも、ツイッターに書いているようなことを全部ぶつけてしまった。

案の定、北村さんは黙ってしまった。こういう時、北村さんは絶対に自分から話さない。何か考えてるなら、今考えてるからって言えばいいのに、私が一通り話し終えるところともすんとも言わないで、ひたすら悲しい顔をした。

「もっと会いたいとか、思ってるなら素直に言ってほしい。忙しいもんね、とか言われても嫌味にしか聞こえないし。そんな簡単に別れたいなんて言わないから。写真も、今言われたってどうしようもないし、そういうことじゃないんだらうけど、その時言ってくれたら撮るのに」

いや、そういうことじゃないってわかってるじゃん。そう思ったけど、北村さんが言ってることも正しい気がして、「私も言い過ぎた。素直になるから、ごめんね」と言って仲直りの雰囲気を出してしまった。

北村さんに不満があったり、お互いに悪いところがあるのかもしれない状況だったりしても、私は結局すぐに謝ってしまう。北村さんに嫌われるのが一番怖いから。結局、私たちはその日の夜も普通にセックスしたし、次の日の昼にはカニクリームコロッケを一緒に食べた。北村さんはいつも以上に、美味しいねと褒めてくれた。コロッケを食べた後はいつもの喫茶店に行って、一緒にモンブランを食べた。一口目を食べて少し大きさに喜ぶと、北村さんはずっと変わらない、私のことをかわいって思ってる時の顔をした。モンブランの写真は撮ってたけど、私の顔は写っていなかった。私は、やっぱりなんにもわかってないけどそういうところが好きだよ、と心の中でイトトした。モンブランは、すごくおいしかった。

*

私たちは変わることができなかった変わらない部分を変えることを求めている。また旅行にも行ったし、夏に見れなかったけど、クリスマスと一緒に花火も見た。お正月に実家に帰った時は、北村さんも実家に帰ってたのに私の地元まで車で迎えに来てくれて、母親にも会わせた。あの日が一番楽しくて幸せで私の中で何度も何度も掘り返して撫でまわす記憶になった。十八年間生きてきた地元で北村さんがいる不思議な感じ。ほんとに田舎だねと笑う北村さん。親とも友達とも何度も遊びに行ったことがあるショッピングモールは、北村さんが母親に会うのにチャライと思われないようになって白いゆるっとしたパンツからわざわざ黒いスキニーを買って履き替えた思い

出の場所になった。一週間振りに会って我慢できなかったから薄暗い立体駐車場でキスしたの覚えているよ。夜になってまだ帰りたくないってなったけど遊ぶところなんてないから、私の高校の通学路をドライブしたよね。全然人いらないから世界にふたりだけみたいだったね。夏旅行に行ったときに山の中で満天の星空をずっとふたりきりで眺めてたときも同じこと言ったよね。つまんなかった地元も帰省も楽しくしてくれたよね。お母さんの前でも全然緊張しなくてしゃべり話せてたよね。お土産に羊羹持ってきてくれてたよね。さすがに前ほどじゃないけど、まだこの記憶さらさらしてあったかいよ。北村さんの記憶はどうなってんだろう。なんにもないんだろうなあ。あのとときのわたし殺されてるんだろ。うなかわいそうだな。かわいかったのにな。

*

本格的に私たちの空気が変わり始めたのは、多分ホワイトデーくらいからだ。北村さんからのお返しは、私のお気に入りのパン屋さんの、パンだった。私の苦手な、桜味のアんパンもまざっていた。

二月は北村さんの誕生日とバレンタインデーだったから、私はクリスマス前からバスデーケーキとボンボンシヨコラの研究をした。二月は私もレポートの締め切りが多かったし、北村さんの誕生日の前々日に検定もあった。

付き合いはじめてから手作りのお菓子なんて何度もあげてるのに、北村さんはいつも、初めて食

べるみたいにすごいね、美味しいねと言って褒めてくれた。だからこそ絶対に特別感を出したかった。専用の型も買い換えたし、ラッピングも百均じゃなくて東急ハンズで買った。ボンボンショコラだけじゃなくて、マカロンとパウンドケーキの詰め合わせも作った。毎年毎年、本人不在の誕生日会とか、お供え物の様に押しキャラのブロマイドの前に手作りチョコを飾ったりしてたら、ちゃんと本人に食べてもらえて、喜んでる姿を見られるのが嬉しかった。

全部自分がしたくてやったことだ。私はこんなに頑張ったのに、考えたのに、時間を使ったのに、なんて考えてしまう私は、本当に性格が悪いと思う。ホワイトデーの日に胸を弾ませながら北村さんの家に行った。机の上の、見慣れたビニール袋に入ったパンを見て、それがお返しだと分かったとき正直、がっかりした。本当に最低だと思う。でも、人間だから見返りを求めてしまうのも仕方がないとも思った。友だちがインスタに載せていた、パステルカラーのマカロンが頭にちらついていた。北村さんがパン屋の中で私のことを考えながらパンを選んでいることを必死に想像した。それだけを考えて、北村さんの前では素直に喜べた部分だけを見せた。

それからの一か月、正直私は以前ほど北村さんに対して「推し」という言葉を使わなくなった。でも、一年記念日の一週間前、私の誕生日に、ずっとほしと言っていた北村さんからの手紙を貰った。当日会うからって0時になった瞬間にお祝いの電話もLINEもくれないんだか思ってたけど、私の気持ちは手紙のおかげで回復した気がした。

「車借りて遠出するのもちろん幸せだけど、えりかちゃんが『おはよう』『おやすみ』『いってらっしゃい』って言ってくれる日常が「ねえ、怒るよ」

夜ご飯を食べて、北村さんがスマホゲームに夢中になっていたのでスマホにスキャンした手紙を読み上げると、北村さんはスマホを取り上げて、写真を削除した。

「あ、ひどい」

「わざわざスマホに入れなくてもいいでしょ」

「だっていつでも読み返したいし」

直筆の手紙はもちろん、コピーしてラミネートしたバージョンも家にある。流石にドン引きされそうだから黙っていた。

「うれしいんだよ。もう人生の二十分の一北村さんと一緒にいられたってことだよ？」

「たしかに、そう考えたら結構すごいね。ほんとあつという間だった」

「ね、ほんとに。でも、最近あんまり会えてなくない？？さみしいな」

北村さんは、困ったように笑った。いつもの笑顔とは何か違う感じがした。

「え、どうしたの？言ってみよ」

顔を覗き込む。何か言いたげな表情をしたまま、北村さんは首を横に振った。部屋の温度が下がっていく気がした。

北村さんの頬に両手を添え、無理やり前を向かせてキスをする。何も気づいていないような顔で私が笑うと、北村さんもまたいつもの表情に戻った。私は両手を頬に添えたまま、北村さんの下唇を軽く噛み、薄く開いたそこに舌を滑り込ませる。ゆっくりと歯列をなぞると、北村さんは一瞬目を見開いた。北村さんの唾内の柔らかさや暖かさを感じているうちに、私の手は北村さん

の首の後ろにまわされ、抱きしめるような体勢になっていた。

北村さんの手が、Tシャツの下にするりと入ってくる。先ほど感じた空気の冷たさは、どこかに消えてしまった。北村さんと触れている皮膚から、どんどん熱いものが流れ込んでくる気がする。私は、北村さんに必要とされている。

鶏もも肉、玉ねぎ、マッシュルーム、たまご。付け合わせ用のじゃがいも。デザートのアイス。今日は一年四か月目の記念日だから、ハーゲンダッツを買った。買い忘れがないことを確認して、いつものスーパ―を出る。八月の太陽は、もう夕方だというのに容赦なくアスファルトを照り付けてくる。アイスが溶けるのと日焼けを気にして、私は急いで自転車走らせた。あつという間に北村さんの家に着く。ポストから鍵をとって、階段を昇る。ドアを開けると蒸し暑い空気と北村さんの匂いが流れ込んでくる。一度深呼吸をして、においを堪能してから、クーラーを付けた。私は暑いのも夏も大嫌いだ。

でも、溶けそうなくらい暑い外から、クーラーがガンガンに効いた冷たい部屋に入る瞬間はとても好きだ。北村さんも、去年の夏の旅行で、ホテルに着いた時そう言っていた。そう言えば、今年の夏休みはどうするか、全然話していない。私もインターンがあるし、北村さんも研究室に試験の勉強と忙しいだろうけど、また旅行に行きたい。LINEのトークアルバムは、もう六個になる。去年の今頃はまだ一つしかなかったし、アルバムを見るたびに沢山思い出ができたなど、

心が温かくなるのを感じていた。

暑い外から帰ってきて、涼しい部屋で誰かがご飯を作って待っていてくれる。やっぱり、誰かと一緒に居るっていいよなあと思う。

北村さん、今日の帰りはいつくらいになるんだろう。LINEを見ても何も連絡はない。今日の夕食は、久しぶりのオムライスだ。付き合ってから初めて作った料理で、私がとろとろのたまごを作るのに苦戦している所を北村さんが楽しそうに動画に撮っていたのを思い出す。オムライスにはベタに名前を書こうとしたけど、結局そこまで振り切れなくて猫を描いた。懐かしいな。

北村さんがいつ帰ってくるかわからないので、とりあえず夕食の準備をする。お米を洗って、早炊きのスイッチを押す。オムライスはもう何度も作ったことがあるし、北村さんの好きな味付けも覚えているのでレシピを見る必要もない。私は北村さんが最近再熱したGreenのメドレーを流しながら、シンクに溜まっていた食器を洗う。フライパンや大きさもシンクの中に埋もれていた。少し前まで、私がいけない時はコンビニ弁当とかレトルトカレーだったのに、最近一人の時も自炊をしているようだった。北村さんは器用だから、多分本気を出せば料理だって私より上手い。実際、オムライスの卵とか私が三か月かかったのを、二回目で成功させていた。今日は絶対北村さんに頼らないで、自分で成功させようと思って何度も動画で確認してきたから多分大丈夫だ。脳内でイメトレをしていると、あっとい間に洗い物が終わった。スマホを確認するけど、北村さんから連絡がない。きっと研究室が忙しいんだろうな。たまご以外は仕上げとして、冷めたら温め直そう。炊飯器を見るとあと十五分と表記されていたので、先に付け合わせの

マッシュポテトを作るために、じゃがいもを洗って茹でる。ぶくぶくと沸騰するお湯の中でゆめくじゃがいもを見つめていると、いつだったか正直すぎる友人が「北村さん？って垢抜けたじゃがいもっぽいよね」と言っていたのを思い出した。思わず笑ってしまった。たしかに、決して色白とは言えないし、顔も髪型でいい感じにごまかしてるけど結構エラが張ってる。北村さんのことは推しだし彼氏だけど、別に全部を肯定したいわけじゃないから友人の例えは秀逸だと感じた。沸騰してしばらく経ったので、じゃがいもに爪楊枝を刺して硬さを確認する。ちょうどいい柔らかさだったので、鍋から出して、冷まして、皮をむいて、潰す。マッシュポテトは、私が作るまで食べたことがなかったらしく、初めて食べた時の感動した顔が忘れられない。私と違って素直すぎるところも、大好きだ。

マッシュポテトを作り終えて、次はチキンライスを作ろうとまな板と包丁を出したところで、チャイムが鳴った。急いで玄関に行つて鍵を開ける。

「おかえり。連絡なかったからもっと遅くなるかと思った」

「……ただいま。ごめん」

北村さんは靴を脱ぐと、早々に部屋の中へと入っていく。

「今日はオムライスだよ。たまご最近上達したから楽しみにしててね」

「うん」

北村さんはこちらを向かずに、黙々と部屋着に着替えた。うるさくてあまり聞こえてないのかもしれない。音楽を止める。

「ねえ、北村さんのテスト終わったら旅行行かない？ 私インターンもそんなに長いわけじゃないし、来年の方が北村さんも実習とかで大変だろうし」

「あ、えりかちゃん」

「あ、そうだ。またお盆帰省するときうちまで来てくれたらうれしいな。お正月に持ってきてくれた羊羹、みんなおいしいうちで食べてたよ。今度はもっとちゃんと地元も紹介するし。あーでも北村さんの地元も行ってみたいな。家族に挨拶とかはちょっとまだ恥ずかしくてできないけどあはは。あ、あとはさあ……北村さん？ どうしたの？ 泣いてる？ そんなわけないよねだって北村さんが悲しくなるようなこと言っていないよ？ あ、そうだハーゲンダッツ買ったんだ食べる？ ストロベリーとショコラトリュフなんだけどどっちがいいかな絶対ショコラトリュフだよ。いやというかオムライスが先だよねははは北村さん悲しそうだから何したら元気出るかなと思ってどうしよ、え、キスしたら元気出る？ それともぎゅってしようか？ あもしかしてお腹すいたかな早くご飯作るからね待っててねたまごうまくやるからちゃんと見ててね」

私は話し続けた。

目の前で意味の分からない涙を流しながら下を向いて首を振っている愛しい人に隙を与えないために。

私が傷つけないために。

振られましたへあーいーいーいーしぬwwwwwwwwマジで振られると思ってなかったわきついで冷めたとか思ってたけど全然冷めてなかったわ笑う

振られましたへ良かったほんとに別れるってならなくてかまだ好きとか説得されてやっぱりまだ付き合おうとか頑張りうとかそんな覚悟で別れたいなんて言わないでよ

振られましたへもし本当に別れたらハンバーグ作るのも下手になるし流行りの曲もわからなくなるしあのスーパー行くこともなくなるし車に乗る回数も減るなあ

振られましたへ結局自分のことが大好きなんだよ私は自分のことを好きでいてくれる人がいなくなるのが怖いんだよ

振られましたへ明日も家来ていいって言われたけどほんとにいつも通りかなやっぱ別れたいって言われたらどうしよう

振られましたへ心から好きと思われないくらいなら今日家行く途中で事故かなんかで死んで一生癒えない傷を負わせたい

振られましたへ手紙書いてみた。心変わりしてくれるといいなハンバーグも作って待ってるからいつも通りでいてくれるかなていうか私がいとも通りでいられますが

振られましたへ昨日から寝てないし飲み食いもしてないけど全然平気ですごい心は平気じゃないけど

振られましたへとにかく本人からの安心する言葉かけてもらえるまでこの鬱から抜け出せない振られましたへ早く帰ってきてほしいけどこわい。ちなみにハンバーグはうまくできました……。

手紙はポストに挟んだ

振られましたへ私がこれから就活とかで忙しくなって人生で大事な時で、今じゃなくても今後そういう時に恋愛のせいで失敗してほしくないし私とはうまくいかないって思ったけどとりあえず今はそれは置いておいて、一緒に居たいらしい

振られましたへ手紙、ドアに付いてるポストに挟んでたら、帰ったと思ったし居てくれてめっちゃ安心したとか昨日別れなくてよかったとか言ってる、ほんとそんな気持ちのまま振るなど思った

振られましたへ付き合うのにはお互いの合意があるのに、別れるのは片方だけで別れられるんだから振った方は二人分の気持ち背負って覚悟決まってるから振ってよ

振られましたへ別れようってずっと考えててバイト中にも泣いてあくびってごまかしたって言ってたけどそんなに考え抜いて覚悟決めて伝えたことがやっぱ違ってたって一日でなるものなの?

振られましたへ私の巧みな話術(?)と泣ける手紙のおかげかな……

振られましたへ次会うの三日後なんだけど大丈夫かなおそろいのカップとか写真とか手紙とか捨てられないって言ってたし、大丈夫だよ

振られましたへ今日もいつも通りだった。ごはん全然食べれて無いって言ったら一口だけでも食べようって言って食べさせてくれた

振られましたへ一緒に動画見てたくさん笑ったしご飯も一緒に作った。もう大丈夫かな

振られましたへもし別れて私に次の彼氏ができたら悲しい？って聞いたら、そうなってみないと分からないけど前向いてくれてよかったって安心すると思うって言われた

振られましたへすごく悲しくて残酷なこと言われているのに、そういうところがやっぱり好きだから私の幸せを願ってくれてることを嬉しく感じてしまうし、そうまで思えるのに別れなかったんだと不思議だった

振られましたへ振られるくらいならこっちから振りたいけどできない

振られましたへ死にたい期待させるようなことするなよ

振られましたへみんなありがとほんとに死なないから大丈夫だよ

振られましたへ頑張ろうって言ったのに一週間しか持たなかったの笑う

振られましたへこの前から一週間たって、あれから色々頑張ってプリン作ったり豪華なご飯作ったり楽しくいること心掛けてたしほんとにもう考え直してくれてたと思ってた

振られましたへこの一週間楽しかったのは本ただけど頑張っていつも通りにしてたって言われた

振られましたへ関係を修復しようとする努力をしようとも思わないうちもう私は好きだった人でしかないらしい寂しすぎて次の約束取り付けたけど別に向こうは会いたいと思わないし私に元気になってほしいから会うだけらしいへ

振られましたへ北村さんと一緒に居ても、もう私は彼女じゃないんだとか特別じゃないんだとか思って悲しくなるけど、一緒に居れない方がよっぽどつらいから気持ちの整理とか言ってまた家行く約束しちゃったへ

振られましたへ今度会う時は鍵ポストに入れておくから合鍵返してって言われて、こういうことしないとえりかちゃん期待しちゃうじゃんって。この一週間期待させることしか言わなかったじゃん頑張って楽しくしてたとかいうけど全部が全部そんなわけないじゃんへ

振られましたへ写真も全部捨てられる決心してんだってすごいね一週間ってへ

振られましたへ無理だよもうなんでこんなことになったんだろうもっと写真撮ってとかLINEしてとか言わなきゃよかったへ

振られましたへ告白してきたくせに振るの、契約違反じゃんへ

振られましたへもう勘違いするようなことしないでって言ったけど、触れ合うことができないのが無理すぎて、嘘でもいいから抱きしめてほしいなんて映画みたいなこと言っちゃったへ

振られましたへ私が泣いてたら背中さすって抱きしめて好きじゃないならそんなことしないでよへ

振られましたへふたりしか知らないことをもう共有できないのもあんなに安心した匂いをもう感

じられないのも長い時間一緒に過ごした人がいなくなるのも北村さんが新しい人と出会うことも関係を進めていくことも全部つらいどれか解決してもどれかが残る〜
振られましたへまだ別れてない別れたくないから〜

私は北村さんの家に通い続けた。できるだけたくさん会いたかったけど、うざいと思われたくなくて様子を見て週に二回くらい一緒に時間を過ごした。北村さんは拒否しなかった。別に、会わなくなったら死ぬとかそんな風に脅したりなんてしてない。私が前を向けるようになるまで会いに来ていいかと聞いたら、私には元気になってほしいから、いいよと言われた。別れたいと言われた日、じゃあ次は木曜日に行くねと言ったら、待ってるねと言われた。

勘違いするようなことしないでって伝えたのに、私も北村さんも本当に馬鹿だと思う。向こうから私に連絡することも話を振ることも無いのに必死に通い詰めて顔色うかがって、元気になる訳がない。それでも、私が話せばやさしく返してくれたし、食卓を囲みながらテレビを見て笑ったりすると、何もなかったんじゃないかと思ってしまった。

私よりずっと頭がいいはずなのに、本当に馬鹿だと思う。気づかない。考えない。だからこうなっちゃったんだよ。

今更耐えられなくなるなら最初からもう家に来ないでって言えばいいのに、どれだけ自分が良い人でいたいんだろう。そういうところが好きなんだけどな。

北村さんは私と別れたらすぐにまた彼女ができると思う。クラスで七番目くらいの可愛さで、

北村さんみたいに今自分は幸せかどうかなんて考えたことがなくて、三島由紀夫の死因が分からないような女と付き合う。私との夢の続きを追う。粘膜を交換する。私の顔かわいかったんだなって後悔してほしいけど私のかわいかったところは一生思い出さないでほしい。

もうどうしようもない。私が話すのをやめたら本当に終わりを告げられてしまう。

ごめんねずっと好きでいられるような女の子になれなくて。北村さんじゃないとだめなんだよ。北村さんがくれたしあわせと同じものをくれるひとなんていないんだよ。

話すことがなくなってしまった。

北村さんの方を見れなくて、顔を逸らすと、台所の包丁が目に入る。想像する。

あの包丁を手にとって、北村さんの、お腹の辺りに刺す。北村さんの肩幅が広くて大きな背中が好きだから後ろから刺すのもいいんだけど、やっぱり顔が見たいから前から刺すんだ。どれくらい苦しくて痛いんだろう。私のことどう思うんだろう。やっと私のことで傷ついてくれるの嬉しいな。

どんどん血が無くなってる体内の動きも感じたいから、それから首絞めておしまいにする。最後の最後に目にうつるのは最高にかわいい私がいいな。

「……あのさ、もう「わかったよ」

「ごめんねほんとうさいよね。もう元気になったから来ないね。ほんとこんなのでごめんね」

私は持ってきたリュックの中に、部屋中にある自分の化粧ポーチやピアス、歯ブラシ等を全部

かき集める。北村さんが何か言って玄関までついてきたけど一度も顔を見ずに家を出た。

外はいつの間にか薄暗くなっていた。

冷蔵庫の中身たち、オムライスにしてあげられなかったな。

階段を下りずに、ふたりで何度も歩いたアパート前の道を見下ろす。私じゃない誰かとふたりで歩く北村さんの姿が見えた。

リュックから化粧ポーチを出し、小さなハサミを取る。刃を手首にあてる。ハサミを引く度に、赤く染まっていく。

拒絶された愛の分だけ、血を流す。

私が殺したいのは、殺せない私だ。

(文学部文学科三年)

海辺の光 — ある作家へ — いうかわれきし

僕は死にました。そういうわけで小説を書きます。

ふわふわと浮いているのですお風呂の水面の陰毛のような浮きかたですそれも20度くらいにさめたお湯に浮いている陰毛です気色悪いです指で絡め取ろうとしてもすり抜けていってつかまえることができません結局はお湯を抜いてしまえますが排水溝にへばりついて気色悪いですそういえば排水溝のなかには海のように莫大な水の世界があってそこには無数の死体が漂っている死体を一度もみたくありませんでした死体じゃないものがどれかわかりませんでしたたとえば「したい」と言うためにstaiとキーボードを叩くように「死体」にするためにスペースキーを叩くようにかたかたかたかたとそれがいのちを終わらせていること The Death of the Text 陰毛。

僕は首をかしげました。これは小説なのでしょうか。ここに書かれる言葉は、何かと地続きのところと存在しているのでしょうか。

心臓が張り裂けそうですとかもう張り裂けているのに何を言っているのでしょうかとか心臓なんてないのに何を言っているのでしょうかからだから消えてしまいましたところからも切り離されてしまいましたいま損なわれているのちはもう大切に思えないのでしょうか神様だけが存在を許してくれたのに自ら神様を殺してしまいました自由と平等の名の下にそんな曖昧な幸福のために神様の心臓をくりぬいてこんなものなかつたんだと大声で叫び回りました街中を駆け巡りましたでもみんな気づいていませんでしたその心臓は「わたし」のものだったのだと。

そもそも思うのですが、死者が小説を書くことは可能なのでしょうか。あるいは、死者が小説を読むことは可能なのでしょうか。もしも不可能だとすれば、何かを切り捨てた言葉などに何の意味があるのでしょうか。とはいえ、何かを切り捨ててはならないのであれば、僕には何ひとつ書くことはできないということになってしまいかねません。日本語はほとんど日本人にしか読めないし、そもそも言葉はほとんど人間にしか理解できないし、もしも断腸の思いで人間の、それも日本人のためだけに書くにしても、僕には大人の気持ちは分からないし、子どもの気持ちもい

まや分らないし、女性の気持ちも切実には分らないし、目が見えない人の気持ちも分らないし、耳が聞こえない人の気持ちも分らないし、いまここに挙げられない人たちのことは意識すらしていません。どれだけ想像力を働かせて、そのところに寄り添ったとしても、もちろんそれはとても尊い行為ではありますが、限界があると言わざるを得ません。また、仮に他者を完全に理解することができていたところで、それを本当の意味で証明する術を人は持ちませんから、分かった気になるのはとても独りよがりなことなのです。だから結局僕に書けるのは、書くことが許されるのは、僕のことだけなのかもしれないとも思うわけですけれど、その自分がもう死者になってしまっているのだから、やはり僕には一体何を書きうるのかという話になってきます。

「この目をずっと待っていました」人がたくさん死んでしまった日はじめて人を閉じ込めてしまった瞳ではじめて人をひとりにしてしまった鼓膜で熱く熱くたまるお湯に白い血に汚れた右手を突っ込み大量の陰毛をひっつかみむしり取りこみ上げる吐き気をこらえながら手指に絡みつく無数のいのちそのいのちをあいしています無数の光の粒の総体としてそんざいしているあなたがひかたりきえたりひかたりきえたり待っている暗い海辺で明滅のたびにすくいあげられるあなたが信じていたいけれど信じられるものだろうかよって立つものがなにひとつない海の中で干からびてしまった魂のよこで。

でももしも書くという行為が自分を傷つけるという事なら、他者を切り捨てるそのたびに、切り捨てた分だけ自分を切り刻めているというのなら、僕は他者との間にフェアな関係を築けるのかもしれないとも思います。

だとすれば死者であるところの僕は、いまずでに誰よりも切り捨てられた存在で、誰よりも傷つけられた存在で、自分の死をしっかりと認識し、それを自らに突きつけるように書かれた小説は、最もフェアであると言っているのかもしれない。

死体の海を冒険しています見渡す限り死体が浮遊していますその死体をよく見たらどれと同じ姿をしています吐き気がしてきます誰もが死んだような目（死体なわけだから当然ではありませんけれど）をぐるんぐるとかき回して辺りをうかがっていて挙動不審な様子です肉体にはあらゆる電子機器が貼り付けられ脳にも無数の電極が突き立てられ思考は何処までも延長し拡大しこころは何処までも短縮し縮小しそれで生きていると高らかに宣言しているのですまあ思考なんてこころなんてはじめから存在しないわけではあるのですけどその事実から目をそらすために神殺しの槍を振り回し突き立て数多のものを犠牲にしながら不毛の大陸へとのし進んできたのです神殺しを殺した武器を持っていることだけが人が生きていてもいい理由なのですからそうでないものは「」と呼ばれるべきなのですから。

フェアであるということはその対象と地続きのところに存在しているということです。何らかの交渉が可能であるということです。つまり小説というものは、僕たちが死者であるがゆえに最も大きな意味を持ったものであるでしょう。

まだ僕たちが生きていたころ、僕たちは小説なんか持っていませんでした。厳密には、神様のために書かれた小説や神様を殺すために書かれた小説はあったかもしれませんが。でもそれは実際には何も本当には表現できていませんでしたし、あらゆる要素においてフェアではありませんでした。どんなものとも地続きになっではいけません。でもいま、僕たちはちゃんと同じ地平にある小説を手に入れました。僕はたまに、生命の奥底と何か別のものが結びつけられるような感覚を得ることがあります。生きているな、と思います。しかしそもそも死んでしまっているわけですから、それは気のせいということになってしまいます。そうしたいくつかの小説さえ、死者とは地続きのところにはありはしないのです。それはとても孤独なことです。

だから僕たちには必要になってくるのです。死んでしまった僕たちによる、死んでしまった僕たちのための小説が。

もうずっと長い間暗い海の中を漂流しているのです死者たちの群れはみんな抜け落ちた陰毛のよ

うにするするとふるえているのです。ただ誰も身を寄せ合おうとはしませんでした。誰も自分がふるえていることに気づいていないのでした。まわりに触れうることを忘れていたのでした。でも孤独だとは思っていませんでした。なぜなら腐った肉体から湧き出す大量の蛆虫たちを通して繋がっているのです。ですからそうすれば寂しくはないので。ですから蛆虫はどこまでも広がってしまいました。世界中に広がってしまいました。死者たちは自らの肉体をすり減らし消失しながら拡大していました。そうした広がりの中に自己が存在すると信じていました。それがただひとつの道だと教えられてきたのです。から――

しかし、ここでいったん小説を書くのをやめなければなりません。だんだんと僕は自分が死者であることを忘れはじめています。言葉を書くのをやめなければなりません。だんだんと僕は自分が死者に乗ってあれこれ考えて文章を書いてしまっているのです。深く長く物事を考えようと、まるで自分が生きてでもいるような気分になってくるものです。僕は上手な小説を書きたいわけでも、誰かのところを動かす言葉を紡ぎたいわけでもありません。すでに言ったことですが、目が見えている人、耳が聞こえている人にしか分からない小説に何の意味もないように、生きている人にしか分からない小説を書いたって仕方がないのです。僕はそうではないものを書きたい。ただそれだけなのです。

いま僕が綴っているものは、そうした小説になっているのでしょうか。死者によって書かれ、

死者によって読まれうるものを生み出せているでしょうか。いや、そもそもそれは一体、どんなものなのでしょうか。

そろそろ少しだけ方法を変えてみようと思います。自分が生きていることへの疑いを抱きはじめたころに書いた小説を紹介してみようと思うのです。そうすることで、僕が目指しているものが具体的に见えてくるような気がします。

それはたとえばこういうものです。

ある昼のこと少女はマンションの一室で母親代わりの《嘘》に問いかけます。その声はなにも
のにも代えがたく澄んで、その澄みかたはこの世にあり得べからざる澄みかたであったので、少
女の名前は《純真》でありました。

「ここは何階なの？」

「さあ、何階でしょうね。私にも分からないの」

それよりも、と《嘘》は積み木の箱を押し入れから引っ張り出してきます、いそいそと引っ張
り出してきます。お家をつくりましょう、あなたの本当のお家を。《嘘》は四角柱と三角柱と円
柱の木材を箱から出して並べます。

「わたし、もうそんな年じゃないわ。おしやれにもきょうみがあるし、ときどきは男の子と手をつなぐゆめだっ
て見るの」

《嘘》は積み木を組み立てます。円柱を四方に配置しそれらを四角柱で結んでいきます。《純真》はそのようすをじっと見つめて、やがて仕方なしに三角柱に手を伸ばします。

「ほら、やっぱりまだ子どもね」

「やれやれ」

《純真》は以前、もっと広くて自由なところに住んでいました。そこは草原に似ていました。瑞々しい草が生い茂りそれらは日の沈むころにも朝露にぬれていました。そして空は、まるで真実そのもののように、どこまでもどこまでも高く澄んでいました。けれど《純真》はそこにいたときのことをほとんど覚えていません。少女はあまりに幼く、そしてひとりだったからです。

いま、《純真》のそばには母親がいました、それはどれだけの時間狭い部屋に閉じ込められることになったとしてもかけがえのない絆でした。

《純真》は毎朝《嘘》の腕のなかで目覚め、《嘘》のつくったスクランブルエッグとこんがり焼いたトーストを食べます。「むしゃむしゃ」そして少しの時間、算数や国語や英語の勉強をして、そのあとお絵かきをします。

お昼はレトルトのパスタで済ませ、「もぐもぐ」その後は二人で遊ぶための時間です。遊びの内容は毎日違います。トランプをすることもあればテレビゲームに興じることもあり、その日のように積み木で遊ぶこともありました。遊び疲れると、《純真》はしばらくお昼寝をします、レースのカーテンを通り抜ける淡いひかりに包まれながらソファで眠るのです。

目覚めると《嘘》が腕によりをかけたハンバーグの匂いが漂っています、ぐーぐーなるお腹に手を当ててテーブルにかけよると、おいしい料理に飛びつきます。「もきゅもきゅ」その後は歯磨きをして、お風呂呂に入って寝るだけです。《純真》と《嘘》は並んで歯を磨き、お風呂ではからだを洗いっこし、ぎゅっと互いの区別がつかなくなるほどに手足を絡ませながら眠りにつくのでした。

《純真》は《嘘》のやさしい眼差しが好きでした、あたたかな手が好きでした、後ろからそっと抱きしめられて、小さな頭を撫でられるのが好きでした。

でも不満に思うことだっただけなくさんあります。《純真》はどこにあるかもわからないマンションの、それも何〇何号室ともしれない部屋にずっと閉じ込められ、一歩も出ることはできないのでした。出入り口は内側からも鍵がなければ開けられないばかりか、部屋中探しても窓一つなく、外の様子を見ることさえできないのです。

《純真》は何度も外に出ようと試みました。たとえば、一週間に一度か二度だけ、《嘘》が隠し持っている鍵を使い、部屋を出て買い物に行くのを《純真》は知っていましたから、そのタイミングをねらって一緒に飛び出してしまおうとしたことがあります。もちろんそれで外に出て行けるとまで思ったわけではありませんが、せめてちらりとでも外の様子を見てみたかったです。

しかしそれは失敗に終わりました。ドアをわずかに開いたところで、駆け寄ってくる《純真》に気づいた《嘘》は、血相を変えて少女を抱き留めその目をふさいでしまいました。じたばたと

もがく《純真》でしたが、そうこうしているうちにドアは閉じ、鍵もひとりでにかかってしまいました。腕の中から飛び出した《純真》は、その頬を焼いている餅のように大きく膨らませました。「なんでお外にでちゃだめなの！」

「お外にはね、とっても危ない《怪獣》がいるのよ。あなたのようなこどもがお外に出ると、すぐにおそわれて食べられてしまうの。だから絶対に出てはだめ。何度も言っているでしょう」

「お外を少し見るだけでもだめなの？」

「そうよ。ただ見るだけでもだめよ。もしもお外をのぞいたとき、《怪獣》の姿が目に入ってしまったら、目からあなたのなかに入り込んで、あなたのところが食べられてしまうの」

「《怪獣》はここも食べるの？」

「そうよ。こどものところが大好物なの」

「ねえ、《怪獣》ってなに？」

わずかな時間、《嘘》は目を伏せました。そして《純真》にその目が向けられたとき、そこには優しさだけがありました。

「言葉にできないくらい、恐ろしい生き物よ」

好奇心を抑えきれない《純真》は、その後も部屋から出ようと試行錯誤を重ねました。けれどそうした努力とは関係なしに、その機会は思っていたよりも早く訪れました。ひとつのかなしみと引き換えにして。

ある夜、高く積み上げた積み木が少しずつ崩れ落ちていくような、細かな地響きを聞いて《純真》は目覚めました。それは彼女にとってはじめての経験で、不安に思つて腕の中から母親の顔を仰ぎ見ると、《嘘》は肖像画のように停滞した微笑を浮かべて少女の顔を見つめていました。重ねられた瞳は黒く染まり、それはあらゆる色彩をない交ぜにしたときに生まれる色あいだと《純真》は知っていました。地響きはどんどんその激しさを増していました。

「ここにいなさい」

《嘘》はぎゅっと《純真》を抱きしめたあとで、静かにそう言つてベッドを出ます。

「だれかくるの？」

問いに答えずに、《嘘》は視線を玄関の方に向け、もう二度と少女の方を見ることはありませんでした。

するどい視線を玄関に向けたまま、《嘘》は台所の戸棚を開け、包丁を取り出します。いつも料理をしているときは異なる鈍い輝きが部屋を走りぬけ、《純真》の不安がさらにかき立てられました。

「たべられちゃうの？」

地響きは部屋を何重にも突き上げてくるようで、いよいよ何かがすぐ近くにまで近づいてきているのだと分かりました。

「……何を見ても、こころをつよく持つの」

《嘘》は少女の問いには答えず、静寂を押し広げるように深みに満ちた声で言います。

「あなたが目にするもの、耳にするもの、触れるもの、感じるもの。それらはすべて、本当のものなの。そうでないみたいと言われることがあったとしても、それは悪い人たちが積み木みたいに作り上げた嘘にすぎないの。だからあなたは何も気にしちゃだめ。傷ついちゃだめ。絶望しちゃうだめ」

《純真》はわけもわからず震えながら母親の後ろ姿を見つめていました。いまこうして背中を見つめることは、ほかの何事にも代えがたく重要であるのだと分かっていました。

「忘れないで。あなたの名前を、からだを、顔を、体温を、声を、こころを、そして……」

その声は嘯みしめたくつもの切実な想いの後におとされました。

「……そして、この世界で、あなたが本当に存在しているということを。その代えがたさを」

巨人が立ち止まったように、地響きが一斉に止みます。

そして、そのドアは開かれました。

そのあとのことを《純真》は何も覚えていません。

ここにはある予感とでも言うべきものが表現されています。それは何か大切なものが失われる予感です。ただ、深く考えるまでもなく、ここには人間のこころというものが存在しています。

というよりも、まだ存在しています。それがテーマと言ってもいいでしょう。だからこの文章は誰かのこころを動かすことがもしかしたらあるのかもしれない。何よりもここには明確な物語

があります。物語ることは生きている人にしかできないことです。なぜならそこには時間が存在し、空間が存在し、語り手が存在し、目が存在し、耳が存在し、思考が存在するからです。そして何より物語は幾重もの嘘の集合体に過ぎないからです。死者は最も真実に近い存在であり、嘘をつくことも、それによって表現することもできません。そういう意味では、はじめに書こうとした小説との間にはっきりとした区別をつけることはできていないのかもしれない。ただ、言い訳のようですが、あれらの文章群は自分が物語りの片鱗を忍ばせていることを自覚し、そのことによって自らを責め立てていました。逃れようという蠢きがありました。ただ漫然と生の領域にあぐらをかいていたわけではないのです。

ではこの後に書かれた、できる限り物語を削ぎ落とした小説を見てみましょう。

……る。……る。星が降る。星が降る。

その夜のことはいまでも覚えている。風は冷たく海辺を吹き抜け、波音は星降りの擬音のように硬質な音を奏でている。僕らは何処かを目指している。

ぬれた砂浜に裸足をもぐらせて、冷たいねと囁き合いながら歩いている。跳ねた泥水があなたの頬を汚し、袖口で拭っていると再び星が降りはじめ。水平線の向こうに無数の細い光が流れ込んでゆく。隣をみて、その光であなたのこころを読み取ろうとする。星降りにそれ以上の意味はないのだと信じている。

「僕は何かを言おうとする。
星は光ってなどいないのだと気づいている。」

これはひとつの挑戦でしたが、やはり物語に過ぎないでしょう。明確な「僕」という主人公がまったくの無批判で登場しており、他者との関係性も当然のごとく存在してまです。ただ、こころや言葉というものの存在がより不安視されている点では成長と言うべきかもしれません。

さらに物語から脱却しようとした小説を見ていきましょう。

上昇する太陽には

人を殺める深度があると

教えてくれた少年は森の奥に隠れている

何も言うことができなかったから

隠れている

決して殺されることがないように

火をおこすことができる人々は
その恐ろしさを知っている
その消し方も知っている

だが

二度と絶やさないと決めている
この手のつめたさの
あたため方だけは知らないから
ほかには何ひとつ

息絶えた少年の手を
この火にかざすとき

せめてあたたためようとかざすとき

少年の目が

見開かれ

睨みつける

こちらを

きつく

冷たく

《Théâtre de la cruauté》

たぐり寄せる

深く深く沈み込んだふるえが

名前のない影を

感染していく

ペストだけでなく演劇も

演劇だけでなく太陽も

昇りゆく速度で拡大していく

その痛みを

その汚れを

その否定を

肉体 つまりその喉を伝って

太陽が上昇する

沈黙だけがささやかな防波堤となり
しかし沈黙を奪われた魂があり
ふるわせた喉には陽光が燃えさかる

太陽が上昇する

すべてが明らかにされ

すべてが燃やし尽くされる

太陽が上昇する

何かを語らなければならず

何かを燃やさなければならぬ

太陽が上昇する

少年の喘ぎがきこえる

干からびた鳥が落下してくる

木々が火を噴いている

街が炎に呑み込まれる

太陽が上昇する

海が干上がり

星が吹き散り

心はなおざりに転がされる

太陽が上昇する

そして喉から産声をあげ

悲鳴をあげ

ついに「私」が切り出される

「私」が生まれてくる

あらゆるものの燃え尽きた灰のうえに

伝えたいことなど何ひとつない世界のなかに

しかしこれもまだ物語の形を留めています。また、「私」という語り手が発生することで排斥される多くのものたちのことが描かれている点で内省的な小説と呼べるのかもしれませんが、しかしその問題意識が文章全体に行き渡っているわけではないので、これは失敗作だと言えるでしょう。

次のものはますます物語から掛け離れようとしたものです。

ぐーぐーむーむる愛のむれ

きみの名前は誇大妄想

心配性のわたくしは

いつでも部屋でぐぐむる

てーてーらーらる愛のとげ

きみの病は空理空論

くちばし黄色いかなしみは

いまでも部屋でてーてらる

ちゃっぷりげんげんちゃっぷりげんげん

最近はよくないていますわたくしは

これは何かの前触れでしょうか

セルレルロイゲンセルレルロイゲン

黒い華

に口づけを

夜の魚雷にご注意を

蓋のないまま始めた鍋よ

煮えない鶏肉食べるべからず
排水溝に捨てちまえ！

あまねき溶液リピート地獄
わたくしは今日も読むのです地獄変

ぐーぐーむーむる愛のうた
きみの言葉はがらんどろ
それでも心のそばにいて
明日も部屋でぐーぐむ

ここでは明らかに物語が欠落しており、同時にここらところというものの存在もすでに失われてしまっているように思えます。喪失——もっと正確に言うのであれば不在——を理解しながらも受け入れられない人間のむなしさが滲み出ているのです。

ただ、いま見てきた二編の小説を見て、あるいはいま僕が目指しているものの姿を思い浮かべて、ひとつの疑問が浮かぶことは想像に難くありません。それは文学の形態として、小説と云いうるのだろうか、ということ。つまり、僕は小説と言いついて張っているけれど、どちらかといえ

ば、詩なのではないかと。

確かにそうかもしれません。詩という最も崇高な文章芸術のありようを自分の作品の冠として戴くことの恐れ多さからいったん目をそらして語るとすれば、いま紹介したものは詩なのかもしれません。ですがそうだとすると、僕の試みは失敗していると言わざるを得ません。僕が書いたものの、目指しているものが詩だとはどうしても思えないのです。なぜなら詩は何かと地続きになることをほとんど拒否してしまっているものだと考えているからです。詩はひとつの孤島として存在し、他の何ものからも独立しているがために代えがたい価値を持っているのです。

たとえば詩は完璧に死者について語りうるかと僕は思います。しかしその姿は死者であるところの僕たちであっても知覚することはできません。海の果てにあるそれを、何かありそうだなと想像するのが関の山です。

だから、僕は小説を書きたい。あらゆるものと地続きになっている小説を。
でも、本当に詩は僕の行く道に関わっては来ないのでしょいか……。

釈放されたので山道を歩く渡された衣服は酷く重くまとわりつきやがて脱ぎ捨てた街は人が作り上げた世界だから人の定めたルールに従わなければならぬ山もまた人が作り上げたものになりつつある僕の居場所はどこにもないなあ。パンツを探さなければならぬ僕がはくことが出来るパンツをはかなくてもいいのかもしれないけどどうしてパンツをはかなければならぬのだろう

はかなければならないと思っっているのだろうそれは性器を隠すためだどうして隠すのだろうそれは性的なものを隠蔽するためだどうして隠蔽するのだろうそれは生まれてくる子どもを制限するためだどうして制限するのだろうそれは僕らを生かすことの出来る資源が限られているからだ長生きするようになった僕らは増やすことではなく残すことを意識するようになったから僕は生き残るためにパンツをはかなければならないどうして生き残らなければならぬのだろうそれはパンツをはいているからだ・獣道を進んでいると桑の葉のうらにカイコくんちゃんがいたその純白の裸体に僕は恋した僕と一緒に来てほしいと思った「僕と一緒に来てくれない？」カイコくんちゃんはいう（もちろんカイコくんちゃんは日本語をしゃべれないのでそれはカイコ語だ）「なんでですかなんでですか」君に恋したんだ」「まあうれしい」「でもあらかじめ分かって欲しいことがあるんだ僕が君と一緒にいたいのは君との間に子孫を残したいからだし君に優しくするのは君との間に子孫を残したいからだし君を傷つけるのも君との間に子孫を残したいからだしそれ以外に何かあるように見えるとしたらそれは気のせいに過ぎないってことを」「でもカイコと人間じゃセックスはできませんよ」カイコくんちゃんは最もなことを言った「あなた壊れてるんじゃないませんか？」「そうかもしれないでもはじめから存在していないものが壊れるなんてことあるんだろうか」

あらゆることに価値がないと認めればあらゆることに等しく価値があるようにふるまうことができる強く抱きしめたときに訪れる甘い痛みと強く突き放したときに訪れる辛い痛みとの等しさを

僕らの心臓は腐りきった蜜柑を握りつぶしたように動悸するその腐臭を味わおう忘れていたことを思いだそう目をそらしていたことに目を向けよう怒り狂う両親を尻目に僕があなたを愛することとは美しいけれど僕が見知らぬ虫を愛することは醜いそんなこと思わなければ傷つけないためだけに生きていけるのに想いに絡みつくものなんてないはずなのに僕らを取り巻く無数の線は多くものを切り捨てる僕らの安寧のために安寧は愛すべき停滞だけれど噴き出したはずの血液を僕らは浴びたことがない両の目に捉えきれない景色を僕は見られないだろう両の手に触れられない肉体を僕は愛でられないだろうでもそれらを思い出すことはないなぜなら記憶に刻むことすらなかったから僕の容量は人一人分にも満たないから誰かのために与えられる隙間なんてないはずだから

これは数ヶ月前に書いた小説の抜粋です。前半部分には物語があり、後半部分にはありません。しかしここらというものは逆に、前半において振り落とされ、後半において受け止められているように見えます。愛すべきカイコくんちゃんとの邂逅が描かれる感動的な場面ですが、前半部分ではすべての地の文、台詞がこれ以上にないくらい空虚に響き、後半はただの言葉の羅列ですが何か意味ありげな内容がささやかれています。つまりここで挑戦されていたことは、おそらくこういうことだと思えます。

ふたつの小説を融合すること。そうやって本来交わることのないもの同士を地続きにすること。

思い出しました。ここに僕は、死んでしまった僕たちによる、死んでしまった僕たちのための小説の似姿を見たのでした。

たとえば物語と非物語の融合によって僕たちは死を自覚していない者と死を自覚した者を繋ぎ合わせるができるかもしれません。では、死者と死者を地続きにするためには何を融合すればいいのでしょうか。

先ほど、詩についての話をしました。詩だけが、本当に死者のことを表現しうるのかもしれないと言いました。だとすれば、複数の詩をひとつに結びつけることができれば、それは死者同士を地続きにすることになるのではないのでしょうか。そして、決して交わりようのない詩たちの間を埋めていくために、小説は書かれるべきなのではないのでしょうか。そうした小説のありようこそが、僕の求めているものなのではないかと思えます。

これを踏まえて最初に提示した小説を読み返してみましよう。

ふわふわと浮いているのですお風呂の水面の陰毛のような浮きかたですそれも20度くらいにさめたお湯に浮いている陰毛です気色悪いです指で絡め取ろうとしてもすり抜けていつつかまえることができません結局はお湯を抜いてしまえますが排水溝にへばりついて気色悪いですそういえば排水溝のなかには海のように莫大な水の世界があってそこには無数の死体が漂っている死体

を一度もみたことがありませんでした死体じゃないものがどれかわかりませんでしたたたとえば「したい」と言うために *stair* とキーボードを叩くように「死体」にするためにスペースキーを叩くようにかたかたかたかたとそれがいのちを終わらせているということの *The Death of the Text 陰毛*。

実のところ、この小説ははじめ別の形をとっていました。

ふわふわと浮いている

二十度くらいに冷めた

お風呂の水面の陰毛のように

指で絡め取ろうにも

隙間からすり抜けて

お湯を抜いても

排水溝にへばりついている

死体を一度もみたことがなかった

死んだものと生きたものの区別がつかなかった

排水溝のなかには

海のように莫大な水の世界があって

そこには無数の死体が漂っている

「したい」と言うために *shitai* とキーボードを叩くように

「死体」にするためにスペースキーを叩くように

かたかた

かたかたと

それがいのちを終わらせていることの

The Death of the Text

陰毛

これはもしかしたら、詩と呼んでいいのかもしれない。優れているかはおいておいて、少なくともひとつ固有の島を形成できているようです。しかし、やはり僕は物足りなさを感じたので

した。この詩は何とも連絡していない。地続きではない。

だから僕はこの詩をあのような姿に改変したのでした。あれは詩ではありません。散文詩でもありません。あまりにも意味が繋がりがりすぎていて、空白部分が少なすぎるからです。それにどうにもうるさい。詩の根底には沈黙が満ちていなければなりません。沈黙だけが本来的な存在なのです。でも人は沈黙をただそれだけのものとして味わうことができません。蛙の飛び込む音から沈黙を読み取るように、言葉という音声で沈黙をかき乱すことによって、はじめてその美しく恐ろしい純粹な姿を確かめることができるのでしょうか。

ともかくこのときに僕がしていたのは、詩を小説にする、という取り組みなのだろうと思います。それはただ孤島を破壊し、薄く引き延ばしているだけなのです。やはり自分が目指しているものが曖昧になってしまっていたのでしょうか。

僕がするべきは、いくつかの詩を生み出すこと。その詩を結びつける小説を書くこと。それはここまで積み上げてきた小説群を漂泊するように見ていくなかではっきりしたところでは。

とはいえ、具体的にどうすればいいのか。作り上げたとき、その小説はどんな姿をしているのか。やってみないことには分かりません。あらかじめ考えて答えが出せるような命題なら、そもそも小説として書く必要などないのです。書くという行為の結果として、何らかの答えが浮き出てくるというのが、本当にフェアな向き合い方なのだろうと思います。広大な夜の海を漂泊するなかで、救いとなる海辺の光——それは灯台のようなまばゆいものかもしれない、街の灯りのような暖かなものかもしれません——を見つけようと願うなら、まずは船を漕いでみなければ

なりません。恐怖と向き合いながら、からだの節々の痛みを耐えながら、どこかを目指していかなくてはなりません。もしもその光があらわれることがなくても、そうやって漕ぐという行為自体が、すでに暗闇の中から浮き出てくる光なのです。たとえば僕がいま死んでいるとして、同じ死の海に溺れる仲間たちと連絡を図ることでどうにか自分を慰めようとしているように、あるいはこうやって言葉を紡いでいることそのものが、ささやかな死の反証となっているように、そこにはもう光が含まれているのです。

そういうわけで、僕は小説を書きます。

(文学部文学科三年)

春が来るまで

奥山みつき

地元のお盆明けの早朝の空気が世界で一番おいしいと思う。

風呂上がりに飲む冷たい麦茶が喉を通り抜けていくあの感じに似た清涼感が、両方の肺に染み渡る。この時期の朝、ほんの短い時間しかない涼しさと、それをかき消すように鳴いているツクツクボウシ。戻ってきたな、と思う。県外の大学に通っていた一昨年まではお盆前まで授業があり、混雑を避けて九月のあたまごろ帰省していた。吸いたくても吸えなかったこの空気が、昨年実家に戻ってからは思う存分楽しめるようになった。

外の空気を吸った後は、身支度を済ませ、台所へ向かう。毎日、母親が僕と父親の弁当を詰めているところを覗いては、その中身を確認する。といってもそんなに目新しいものが入っているわけではない。大抵は、赤いウインナーが二本と、刻んだネギが大量に入った卵焼きでおかずの八割が占領されていて、残りのわずかなスペースに、昨日の夕食の残りが入れられる。そして何より、母の弁当を特徴づけるのは、小さめの弁当箱に対して大きすぎる梅干しだった。母は節約上手で、めったに高い買い物はしないのだが、梅干しだけは「日本人だからね」と言って国産の

少しいいものを買っていた。はちみつ漬けで、酸っぱさは弱い。「梅干しには抗菌作用があるのよ」と口癖のように呟いては、それを特別梅干しが好きではない僕と父親の弁当箱に惜しみもなく一粒まるごと放り込む。これ以外の弁当は体が受け付けないのではないかと思うほど食べなれた味。僕はそれらが弁当箱の中で決められた位置に収まっていくのを見るのが好きだ。

社会人二年目、初めての勝負の夏だ。さっきまでですがすがしく透明だった空気が、もうじつとりと重く体にまとわりついた。村井さんが大変だと言っていた「お盆明けの一週間」。さあ、かかってこいと気合を入れるように自分に言い聞かせ、車に乗り込みアクセルをじわりと踏んだ。

地元に戻りたいという希望を満たす就職先として、選んだのがこの自動車学校だった。工学部卒業の身としては、曲がりなりにも機械と触れる仕事だしいいのではないかと感じてやってきた。大学の同級生、特に工学部は、大学院への進学を志す者が多かったので、僕のように地元で絞って早々に就活をする者は珍しかった。

お盆明けの自動車学校というのは、祭りのようににぎやかで、そしてとにかく忙しい。この時期は夏休みに帰省した大学生がかなりの数やってくる。僕は昨年の夏はまだ指導員資格を取る前だったので、先輩方のもとで勉強を重ねつつ雑用をこなしていた。したがって、指導員としての夏は初めてなのだ。

信号を待っていると、目の前の横断歩道を数人の高校生が渡っていった。部活の練習だろうか、

鮮やかな色のTシャツが目を引く。夏の後半戦が動き出した感じがする。

山に囲まれた実家から車で三十分。地元では、比較的「まち」と呼ばれるエリアに位置する勤務先に到着した。

「お、早いな駆溜かけろ」

指導員室に入るや否や、こちらから挨拶するより先に声をかけられた。

「おはようございます。いや、村井さんの方が早いじゃないですか」

村井さんは五十代前半のベテラン指導員だ。昨年僕が入社した時からいろいろと教えてもらっている。仕事の傍ら、指導員になるための資格試験対策に付き合ってくれた僕の先生でもある。おっとりした話し方と笑うとなくなりそうな細く垂れた目が、村井さんの性格をすべて物語っている。

「まあな。何年経っても早く出勤して気合入れとかないといかんくらい、大変なんよ」
大変だといいながらも、村井さんの目尻にはくっきりと笑いじわが刻まれていた。

昨年の秋、晴れて指導員となった僕は、冬休み、春休みのこれまた忙しい時期を経験してはいらぬ。繁忙期の間、「顔が疲れとるぞ、若者」と何度も村井さんに言われてしまった。そういう村井さんも、眠気覚ましなのかいつもは一日一本の缶コーヒを一日三本飲んでた。そして春休

みの繁忙期が落ち着くと、村井さんは「次はいよいよ夏だな」と指導員室で僕の方を向いて、目を完璧な三日月型にして言った。やわらかい春の夕日が、僕たちを包んでいた。

体力に自信のない僕には、これからの二週間がどれほどこたえるか容易に想像できた。この学校のスタッフが一番若いのに情けない。村井さんたち先輩方の仕事を見ながら勉強した昨年の夏も充分大変だった。でも、指導員という違う立場で迎える今年の夏は去年とは違う。だからせめて、この夏は村井さんみたいに笑ってしよう、とひそかな目標を立てる。そして何より、僕はここが好きだ。

僕自身は大学近くの街中の自動車学校で免許を取った。様々なことがパソコンのデータで管理され、指導員は淡々と標準語で進行方向だけを伝えていた。カーナビの指示に沿って運転するのと何ら変わらない教習がスタンダードだと僕は思っていた。僕は運転そのものが好きだったから、それでも十分楽しかった。でも、初めてここに足を踏み入れた時、街中の自動車学校にはなかった何ともいえぬ温かさを感じたのだ。冷え切った足が、こたつの中でじんわりと温まっていくのに近い感覚だ。フレンドリーという言葉がよく似合う先輩方を見て、初めは驚いた。僕のイメージの中の自動車学校とは違っていた。でも、緊張しいな僕にはその方がありがたかった。耳になじんだ方言まじりの雑談は、僕の中の何かを満たしてくれる。

そして、特に村井さんは休憩中もお喋りだった。

「安全なのが大前提だけど、話が弾むドライブの方が楽しいに決まっとるよ」

そう言って昨日の晩御飯のことから自分の学生時代の話まで聞かせてくれた。路上教習のとき

に生徒にも話しているらしい。

村井さんの話はいつも魅力的だった。普通、他人のどうでもいい雑談なんて、不必要なものとして気づけば記憶から消し去られているものだ。なのに村井さんの語るものはすべて―家庭菜園で作った酸っぱいプチトマトも、娘さんが幼いころに作ってくれた不格好な折り鶴をバツタだと勘違いして怒られたことも―一度聞いたなら忘れることはできない。

村井さんは奥さんと高校三年生の娘さんと暮らしている。昨年秋、一度だけ村井さんの家族と会ったことがある。好きなマンガの新作が出たので、少し足をのばして本屋に行った帰りに母親に頼まれてスーパーで久しぶりに「おつかい」をした。そこでぼったり家族と買い物をする村井さんに会ったのだ。見るからに元気のいい感じの奥さんと大人しそうな娘さんだった。特に娘さんは下がった目尻が村井さんにそっくりだった。あごの下で切りそろえられた黒髪が店内の照明に照らされてつやつやしていた。

後で知ったことなのだが、村井さんの娘さんはとても優秀らしい。地元の狭いコミュニティの中で生きていると、何かと情報が筒抜けになることが多い。それは悪い意味ではなく、ここに生きる人には至極当たり前のことだ。特に学校に関することは、子供が少ないから情報のまわりが速い。この地域には公立の高校は一つだけで、学科も普通科と工業科しかない。僕も村井さんもその高校を卒業しているし、今この学校にいるスタッフの子どももそこに通う人が多い。そういう田舎特有の事情ゆえに僕は人伝にそのことを知ったのだ。村井さんは娘さんの出来がいいこと

は謙遜しているけど、他の先輩指導員が言っているから間違いない。

「まもなく、一時間目の教習が始まります」

館内放送が流れる。「よし、行くか」と言い終わる前に、村井さんは席を立ち、意気揚々と指導員室の出口へ向かっていった。

僕が今担当しているのは、大学一年生の女の子三人と男の子一人、そして大学二年生の男の子一人だ。この学校では、基本一人の指導員が卒業まで同じ生徒を教える。年恰好の近い大学生から「先生」と呼ばれるのはなんだかむずがゆい。自動車学校の指導員というのは、生徒と人生でおよそ一か月、長くても半年程度しか関わらない特殊なタイプの先生だ。この仕事をしていると狭い世間にもいろんな人がいるなあと常々思う。明るい茶髪で左耳に三つピアスをつけた、僕からするととっつきにくい見た目の女子大生が、近代文学を熱く語りだしたこともあった。学科の授業でいつも寝ているのに、いざ筆記試験の問題を解かせたら、一発で合格点を取った高校生もいた。大学時代に、一通り様々なタイプの人間と関わったと思っていたが、その考えは甘かった。経験の少なさを思い知らされる。僕はまだ若い。

今日は学科の授業を一時間担当するほかは、朝から晩までずっと技能教習が入っている。教習車の中は冷房をつけているけど、黒っぽい座席が日光で熱くなっていてなかなかつらい。窓ガラ

スを突き抜ける日差しがじりじりと肌に焼き付く。教習中は事故を起こさないように細心の注意を払うからか意外と疲れも暑さも感じない。「心頭を滅却すれば火もまた涼し」とはよく言ったものだ。しかし教習を終えて指導員室に戻った途端、なだれ込むように疲れが襲ってくる。昼休みに入るタイミングは特に危険だ。

「ちょっと、平川さん。邪魔なんですが」

「あ、すみません」

やってしまった。休憩時間に椅子にもたれ、伸びをする習慣が気付けば身についてしまった。その習慣のせいで、通路をふさいでしまったらしい。僕を注意した人物、木野さんは、スタと別の休憩室へ歩いて行った。

この学校唯一の女性指導員である木野さんは四十年代前半で、誰よりも仕事が早い。どんなに暑い日でも、木野さんの一つにまとめた髪と右に流した前髪は崩れない。確か今は、女子生徒ばかり五人担当している。男性ばかりの指導員室にはほとんど木野さんはいない。ただ、指導員室は冷房が効いて涼しいので、殺風景な自分の机に腐らないよう弁当だけおいて昼休みに取りに来るのだ。

「木野さんを怒らせたら怖いぞ」

村井さんが耳元で冗談めかしてささやく。

「嫌なこと言わないでくださいよ」

僕は弁当を開き、存在感抜群の梅干しを箸でつつきながら言った。木野さんとはほとんどしゃ

べったことがないから、どんな人なのかは詳しくは知らない。

「いや。それがあながち間違いじゃないらしい」

「どこから仕入れたんですか、そんな情報」

かじっていた梅干しは柔らかく、喉に張り付いてきたので、慌てて水で流し込んで尋ねた。

「木野さんの娘さんがうちの娘と同級生やからな」

村井さんによると、例の地元の高校で村井さんの娘さんと同級生、しかもクラスメートである木野さんの娘さんは、常に学年トップの座を譲らない優等生らしい。そして、母親である木野さんは、厳しいことで有名ないわば「教育ママ」とのことだ。

「木野さんの娘さん、確か莉奈ちゃんっていうんだけど、には到底成績では勝てんって、娘が言っていたからなあ」

村井さんの娘さんと木野さんの娘さんは仲が良く、それで村井さんも話を聞いたことがあった
そうさ。

「へえ…」

僕は昨日の残りのきんぴらごぼうをほおばり、村井さんの言葉に耳を傾ける。

「そうさ、娘さん、受験生でしたもんね」

「そうなんよ。最近あんまり話したらんをやけどな」

村井さんは箸を止めて語調を弱めた。細い目は遠くを見つめている。

しまった。受験がいかに関りけりな話題かくらい考えればわかるのに。その話題を振った僕

自身に焦りを覚える。少しは空気を読めなかったのか。

「親の俺が言うのもやけど、頑張っとるんやと思う。夜間教習が終わって帰ったら、もう部屋にこもっとるんよ。朝もものすごい勢いでご飯食べて学校に行っとるし」

言動が無神経すぎたと反省したが、村井さんのその言葉を聞いて、僕はほっとした。

大受験なんて懐かしい。僕は村井さんの娘さんほど勉強熱心ではなかったけど、それなりに大変だったことは覚えている。ぼんやりと回想にふけりながら、僕は卵焼きに箸を伸ばした。

今日はまた特に暑い。九月に差し掛かろうというのに夏がしぶとく居座っている。そこまで汗っかきではない僕も今日に限ってはハンカチが手放せない。こんな日に水色のシャツを着てくるんじゃない。後悔しても遅いが、汗じみが目立って仕方ない。

ただ一つ、発見したことがある。梅干しは、本当に暑くて、たくさん汗をかいたときに食べると、何倍もおいしい。特別この梅干しをおいしいと思ったことなど今までなかったのに。涼しいオフィスでデスクワークをする僕の父は、これは味わえないのだろう。なんだかそれがかわいそうに思えた。

午後一発目の路上教習は、大学一年生の女の子だ。最初はかなり運転を怖がっていたが、もうだいぶ慣れてきた感じがする。

「先生は、学生の頃何か部活してたんですか」

最近はずっと少し余裕が出てきたのか、彼女の方から話題を振るようになってきた。

「んー、一応、吹奏楽部だった」

次の信号交差点は右に行つてと付け加えながら答える。僕の方も、慣れるまでは教習に必死だったから、こんな話ができるようになったのはごく最近のことだ。

「そうなんです。私、リコーダー以外の楽器ちゃんとやったことないので、楽器できるの憧れます」

そうか、と軽く相槌を打っておく。憧れられても困る程度の実力しかなかったのだが、そのことはひとまず黙っておこう。

そう、僕は吹奏楽部だった。小さな田舎の高校は、部活の数も決して充実しているとは言えなかった。運動センスはゼロどころかマイナスだと言ってもいい僕には、スポーツに青春をかけるという選択肢などなかった。かといってひとり部活に入らず過ごすという勇気もなかった。所属した次第である。無知だった僕は、「文化部と言えば吹奏楽部」という固定観念から勢いで音楽室の扉を叩いた。

僕に割り当てられた楽器はクラリネットだった。ほかの男子はパワーと肺活量が求められるチューバやトランペットを担当していたから、同じパートは女子ばかりだった。まさか音楽をする部活でも自分の非力さを思い知らされるとは。

「平川くん、三拍子意識しないと」

パートリーダーだった彼女の声がありありとよみがえる。小さな体からは考えられないようなはっきりとした声だった。そして僕は、最後まで三拍子がどんなものか完全には理解できないまま、必死に楽譜の中を泳ぐオタマジャクシを追いかけていた。

思い出に浸っている間に教習の残り時間は十分ほどになっていた。

「よし、学校の方に戻ろう」

次の信号はちょうど青に変わるところだった。

あの暑い一日を境に、学校の忙しさも、ひいては暑さも少し落ち着いていった。それでもまだ大変なことに変わりはないのだが、一応「お盆明けの二週間」は終わった。長かったような、短かったような。正直に言うとうと、忙しすぎてよく覚えていない。さらに九月の終わりになると、村井さんの飲む缶コーヒーの量が減った。それを見て僕は少しほっとした。今は遅めに入校したか、ゆっくりしたペースで教習を進めた大学生が残っている。その大学生たちも、ほとんどはじきに卒業だ。こうしてひと夏が過ぎていくのだなあと家路につきながら一人で思った。

もうさすがに肌を刺すような日差しはなくなった。秋分の日を過ぎてから、秋を感じる回数が指数関数的にぐんと増えてきた。

「よし、行くか」

大学一年生の男の子と、暑さがピークを越えた夕方の方の路上に向かう。十月になると、校内のお祭り騒ぎは完全に終了する。したがって、僕が今教えている生徒は彼一人となった。彼は実家から一時間半かけて、バスで大学へ通っているらしい。実家暮らしのため、夏休みに急いで免許を取る必要がなく、本人の希望もあってゆっくり教習を進めている。

彼もまた僕が今まで出会ったことがないような印象的な生徒だ。最初は緊張していたのか一言も話さなかったのに、慣れてくると急にマシンガントークを展開した。おっちょこちょいなのか、学科試験の問題を解いても大抵ケアレスマミスで九十九点と惜しい点数を取る。そしてそのおっちょこちょいな性格を見抜かれているのか、高い確率で教習中に警察と遭遇するのである。このことを村井さんに話すと、楽しそうに、

「たまにおるなあ、そういう生徒」

と笑った。僕も村井さんくらいの年になれば、そういう風に見えるようになるのだろうか。

「ドイツ語って難しいんですよ。スカートは男性名詞で、ズボンは女性名詞だって言われたとき、なんでやねん！って心の中で叫びましたよ」

彼との教習の時は、僕は基本的に聞き役に徹している。今日もまた一つ、使いだころのない雑

学を手に入れた。

「へえ…。次の信号交差点を左」

左に車を寄せ、信号を待つ。この一連の動作もだいぶ上達した。

帰宅ラッシュとまでは言わないが、夕方が近づくと昼間よりは若干交通量が増えている。事故を起こさないために、一層の集中が求められる。僕は気合を入れなおすように姿勢を正して小さく息を吐いた。その時だった。車体後方からいやな圧迫感が走った。

「危な…」

「うわあっ!!」

僕と彼の声が重なり合って車内に反響する。

次に気がついたとき、ルームミラーには教習車に接触した黒い車が映っていた。

息をのんだのはと我に返る。そうだ、僕は指導員として車に乗っているのだ。

「大丈夫?」

横を見ると青ざめた顔の彼が言葉なくわずかにうなずく。とりあえず、命は助かった。そしてさらに不幸中の幸いだったのは、今日も例外なく対向車線を警察車両が走っていたことである。言いようのない恐怖心や妙な興奮を飲み下し、周囲の安全を確かめた僕は車を降りた。

どうやら事故は完全に相手の過失であったようだ。僕たちは交通法規を守って停止していた。

そこに居眠り運転の車が突っ込んだのだ。ただ、向こうの運転手が直前で気づきかろうじてブレーキをかけたことで、誰も怪我を負わずに済んだ。

いくら相手の過失とはいえ、事故処理が終わると情けなさがこみあげてくる。職について二年目にして、一生無事故が叶わなくなったのだ。そして何より、彼にトラウマを作ってしまったのではと思うといたたまれない。

「念のため病院にだけは行っとけ」

こんな緊急時でも、村井さんは冷静だった。確かに、事故発生から時間がたって打撲などにより体調が悪くなることもある。指示に従い、僕は街中にある夜まで開いている病院へ向かった。

闇に沈む窓の外の景色は、病院の白さを一層際立たせた。この時間もかなり患者がいる。この病院は診察時間が長いだけでなく、内科、外科、皮膚科から精神科まで幅広く診察してくれるからだろう。僕は消毒液のおいに包まれ、待合室のソファの隅に腰を下ろした。

診察自体はあっけなく終わった。今のところどこも悪いところはなさそうだから、また異変があったら来てくださいとだけ言われた。事故の衝撃からすればあまりにあっさりとしていたので僕は妙に拍子抜けする。

ただ、一つ気づいたことがある。僕が待合室に呼ばれたとき、誘導してくれた看護師の声に体が反応してしまった。

「平川さん、平川駆留さん」

聞き覚えがある。学校の先生になれそうなこの声。聞いただけで、僕の背筋が伸びる。いつ聞いたのか。僕の疑問は、待合室に入っすぐ解消された。見ると彼女は何人かいる看護師の中でも、とりわけ小柄だった。そして左の胸ポケットに止められた名札に。ピントが合う。

看護師 秋田まち

秋田、まち：秋田：そうだ。記憶力に乏しい僕でもさすがに思い出した。僕に三拍子の理論を叩きこんでいた彼女だ。小さい体から出る張りのある声と歩き方は何ら変わっていなかった。最後のコンクールの時、舞台袖から出ていくときに見た彼女のびんと伸びた背中が思い出される。一つだけ変わったことと言えば、今の彼女は薄化粧を施していることだろうか。彼女の方は気づいたのかわからないが間違いない。

病院に来てまで神様は世間の狭さを教えてくる。なんというタイミングでの再会。再会するにしても事故に遭ったこのタイミングでなくてもいいのに。まあ仕方ないよなあと思いながら会計を済ませ病院を後にしようとする。

外は思ったより寒かった。道路を走る車の音に紛れて秋の虫が鳴く声がかすかに届いた。その時、僕の左腕に何かがかすった感覚が走る。

「あ、すみません」

ぶつかった相手は控えめに僕に頭を下げ足早に病院の中に入っていった。怒らせたかな、と気になってその背中を目で追う。病院の入口のライトに照らされて、その姿が見えた。

制服が見えた。どうやら高校生の女の子だ。まっすぐな髪はあごの下で切りそろえられ、病院の白い世界の中でその黒さが際立っていた。

僕は彼女から目が離せなかった。なぜだろう。彼女とぶつかったから気にかかるという理由ではない。ただ、僕の目は彼女に吸い寄せられていた。

受付をする彼女が、髪を耳にかけた。あらわになった横顔を、僕は見逃さなかった。

あのきれいな黒髪、見慣れた母校の制服、下がった目尻――

村井さんの、娘さん――？

間違いない。あの時スーパーで見た娘さんだ。僕の記憶がそう言っている。もうかなり遅い時間だが、どうしたのだろう。

そんなことを考えていると、スマートフォンが鳴った。「終わった？遅いから連絡した」と母親からのメッセージが表示された。「うん」僕はたった二文字の返信をうち、スマートフォンを切る。真っ黒な画面に月が浮かび上がっていた。

翌朝、あの事故の時運転していた男の子からしばらく教習を休むと連絡があった。彼も病院では何も問題ないと診断されたが、メンタルの回復が追いつかないとのことだった。突然あんなことがあったら無理もない。電話越しの声は、いつもの彼のような話口調ではなかった。僕もうん、そうか、わかった、と相槌を打つことしかできなかった。

「ごめんな」

反射的に出たのは謝罪の言葉だった。

「なんで先生が謝るんですか。僕たちは何も悪くないし、あの事故は避けようがなかったんですから」

「そうけど…」

一瞬の沈黙が心に刺さる。心臓をきゅっと締め付けられる感じがした。

「…仮免の有効期限、半年でしたよね。それまでにはまた戻ります。車運転できないと、こっちで暮らせないから」

今は彼の言葉が現実になることを祈るばかりだ。かける言葉が見つからず、そうか、わかったとだけ返した。

僕は受話器を静かに置き、自分の席につく。顔がいつもと違う自覚があったから、隠そうと試みて、とっさに学科教本を開き授業の準備をしている雰囲気を出す。

「教習、どうなったんか？あの子からの連絡なんやろ」

やっぱり僕の大根演技は村井さんには通用しない。すかさず聞かれてしまった。淡々と事情を話すよう努力する。できているかは別として。

「事故で加害者になるかどうかなんて、結局心の問題なんよ」

それまで伏し目がちに僕の話聞いていた村井さんが、その細い目をしっかりと開き、僕の方に向き直る。

「運転技術なんて関係ないさ。運転が下手な人の方が安全を意識してルールを守ることだってある」

「はあ…」

「お前たちにぶつかった人もきつとそうだ。運転中に眠ってしまうくらい注意散漫な心が悪かったんよ。だから、なんというか。心の安全が事故防止には何よりの薬やと、俺は思ってる」

いつもの村井さんの柔らかさからは想像できない話ぶりだった。事故は心が起こすもの…その言葉は僕の脳内をぐるぐる回っていた。

僕はまだこの世界に入って日が浅い。したがってまだ村井さんのようにしっかりとした安全運転への自分なりの答えは持っていない。でもきつと、村井さんのこの言葉はいつか僕も気づく真理なのだろう。彼が、事故に遭った彼が戻ってきたら、真っ先にこの言葉を伝えたい。事故の苦しさがわかるからこそ、もう二度と、同じ思いをしてほしくないから。

村井さんはシリアスな雰囲気になりすぎたのを気にしたのか、「まあとにかく」といつもの声色に戻って場を仕切り直した。

「怪我がなくて命があったから、本当によかった。病院に行くまでは、やっぱり心配しとったぞ。そうですよ、すみませんという僕の口はあまりまわっていなかった。口を湿らせようと水分補給をしたところで思い出した。」

「そうだ、病院と言えよ」

僕は珍しく自分から話題を振った。

「娘さん見ましたけど、大丈夫でしたか」

「えっ、何も聞いとらん…でも、学校にはちゃんと行っとったようやし」

「そうですか…」

寂然としなかった。いくら受験で忙しくてあまり話していないとしても、あれだけ家族のことを気にかけている村井さんが何も知らないなんて。待てよ、僕の見間違いか？いや、そんなはずない。艶やかな黒髪と一瞬見えた目元。間違いない。間違うはずがない。

「今日俺夜間教習ないから、早く帰って聞いてみるな」

村井さんが言い終わると同時に、教習開始直前を知らせる放送が流れ始めた。

「なあ」

翌日の昼休み、いつものように缶コーヒーをすすっていた村井さんが僕に言った。

「本人にも奥さんにも聞いてみたんだが、結局何もわかんないんだ。特に具合が悪いようでもなかったし」

例の、「村井さんの娘さんはなぜ病院にいたのか問題」だ。人違いじゃないかと言われたけど、僕には確信があった。見間違いではない。

「そうか…」

僕の言葉を聞き終えた村井さんは、一つ小さな息を吐くと立ちあがり席を外した。

この話を聞いたら余計に気になるではないか。そして心配だ。

その時、僕の脳裏にある考えが浮かんだ。急いでスマートフォンを取り出し連絡先の画面を開く。いつも一番上に出てくるのに、使ってこなかった連絡先。僕には何の迷いもなかった。メッセージを簡潔に記し、送信ボタンをしっかりと押した。

「平川くん」

耳にまっすぐ届く声だ。振り返ると彼女がいた。

「秋田さん、ごめん。急に呼び出して」

「びっくりしたわよ、もう」

そういいながら彼女は近くのベンチに腰を下ろす。日曜日の昼下がりの公園には、何組かの親子がいた。高校の近くにあるこの公園には、僕も学生時代足を運んだことがある。何かをするわけでもなく、ただ外の空気を吸ってぼんやりしていたことを思い出す。

当時、吹奏楽部の中で同じパート同士は連絡がつくようにと彼女とも連絡先を交換していた。

もったも、使うことはなかったのだが。

「で、話って何」

「…病院って、具合悪くない人も来るの」

何言ってるのとあきれ笑いで彼女は言う。

「みんなどこかしら具合が悪いから来てるに決まってるでしょう。なんでそんなこと聞くのよ」
貴重な休日にこんなことに付き合わされるのかと言わんばかりだ。でも僕は真剣なのだ。

「いや、実は…僕の知ってる人の家族が、具合悪そうじゃないのに病院に行ってて、気になったから」

慎重に、でもすらすらと言葉を並べる。

「それは周りがそう思うだけでしょう？病気は、周りからは分からないこと、見えないことの方が多いの。体も、心もそう。だから、その人が元気かなんて、結局はその人しかわからないのよ」
一息に話し終わると、一度呼吸を整え、僕の方に向きなあってまた口を開いた。

「平川くんって、本当変わらねえね。人のことをすぐ心配して、自分に関係ないことにまで労力を割いて。まさかこんなところで再会するとは思ってなかったけど」

今日初めて、彼女の顔が緩んだ。

「高校の近くに、最近カフェができたらしいの。せっかくお互い出てきたわけだし、暇だったら行ってみる？」

彼女はこんなことを言う人だったかな。まあ今日は特に用事もない。すっきりしたわけではな

いが、こんなこともないので誘いに乗ることにした。

「掃除しますか」

ある先輩指導員の一言で、場内コースの掃除をするようになったのは翌日のことだった。今は生徒数が比較的少ない時期なので、この間にやってしましましょうということの話がまとまった。

「私は交通安全教室で小学校に行くので」

木野さんはじめ何人かの先輩はそう言って出かけて行ったので、残っている僕たちが掃除担当になった。

場内コースは意外に広く、手分けしてやらなければ掃除は終わらない。僕は村井さんとともに、一番西側の端の方を掃除することにした。

夏の間伸びた草をひき、落ち葉をかき集める。村井さんと僕の間にはその音だけが流れていた。今日の村井さんは何も話さない。僕はそれがいたたまれなくなって、口を開こうかと考えては何も思いつかずに黙り込んでいた。

無口で作業した分、思いがけず早く片付いた。僕はゴミ袋の口を縛り、立ち上がって伸びをする。

「なあ、ちょっといいか」

「はい」

今日初めて村井さんから声をかけられた。僕は即座に反応する。村井さんはずっとコースの一番隅に移動した。

「言うか迷ったんだけど…」

いつも饒舌な村井さんが今日はやけに口が重い。僕は息を飲んで村井さんの目を見つめる。

「昨日、高校から連絡があって。何かな、うちの娘と木野さんの娘さんの間でちょっとしたトラブルがあったらしい」

「え」

あまりに突然のことで、僕はそれ以外の反応を返せなかった。

村井さんの話はこうだ。村井さんの娘さんと木野さんの娘さんは同じ大学を学校からの推薦で受験した。村井さんの娘さんは文学部、木野さんの娘さんは経済学部を志願していたそうだ。しかし、学科試験のない入試だったので、普段成績では劣っている村井さんの娘さんが合格し、木野さんの娘さんは不合格に。そのことにショックを受け、腹を立てた木野さんの娘さんが急に冷たくなってしまった。大したわけもなくきつく当たられたこともあったらしい。気持ちの整理がつかなくなった村井さんの娘さんは、カウンセリングを行っているあの病院の精神科にこっそりと通っていた…。

返す言葉が見つからなかった。あの日見た村井さんの娘さんの表情がありありとよみがえる。親である村井さんと奥さんにも心配をかけないよう、きつとぎりぎりまで一人で我慢して、対処しようとしたのだろう。村井さんの語る言葉の重みは、僕の心をぐっと圧迫するように思えた。

本当に元気かなんてその人にしかわからない――彼女から言われたことの意味を僕はやっと理解した。

あの日以降、何事もなかったかのように時間が過ぎていった。村井さんはいつも通り話してくれるようになったし、木野さんのポニーテールはいつ見ても完璧だった。もうあの問題は片付いたのだろうか？僕がここまで気に掛けることではないはずなのに、ふと気づくとそのことを心配してしまう。秋が深まるごとに、僕の弁当の梅干しは酸っぱくなっていった。

今日の大きな仕事は、午後からの高齢者教習だ。待機室と使用教室を掃除し、換気をする。窓を開けた瞬間に吹き込んできた風がひんやりと僕の顔を撫でた。

今日の高齢者教習は、木野さんがメインで行い、僕はサポートすることになっている。若い人からお年寄りまで、様々な人に教えなければならぬというのは、この仕事の難しさかもしれない。

い。

午前中の仕事をこなし、いつもと同じように昼食をとる。何の変わりもない、平凡な日常―のはずだった。

昼休みも後半に差し掛かったころ、受付に一人の女性が現れた。

「すみません、木野さんという方はいらっしゃいますか」

明瞭で、かつ毅然とした声が指導員室の方まで聞こえてきた。昼休みは受付スタッフも交代で休憩をとるから対応が手薄になってしまう。村井さんをはじめ指導員も席を外している人が多い。こういう時に動くのが若造の僕の務めだ。席を離れ受付へ向かう。

受付にいた女性は、僕の記憶の中にいた人物だった。

「あっ、村井さんの…」

「妻です。で、木野さんは？」

やはりそうだった。あの時スーパで会った記憶は正しかった。

「あいにく、木野は今、別室で休憩しています。呼んできませんよ…」

「私をお呼びですか」

タイミング良く、木野さんが戻ってきた。

「お待たせしてすみません。指導員の木野です。こういったご用件でしょうか」

「どうもこうもありません。勘違いしないでいただきたいのは、私は今日、親としてここに来て

いるということですよ」

村井さんの奥さんの視線はこれ以上ないほどまっすぐだった。カウンターのの上に置いた手は我慢できないと言わんばかりに絶えず動いていた。木野さんの斜め後ろに立つ格好となった僕からも、その様子ははっきりとわかった。

「お宅の娘さん、とても優秀だと聞いております。ですが、今回の件に関しては、大学に通ったのは、うちの娘の実力ですよ」

「その通りですよ」

「でしたら、なぜこんな問題になったんです？ 親なら、もう少し早く自分の子どもものすることに気づけなかったんですか？」

一息に言う村井さんの奥さんの声には、静けさの奥に威圧感があった。

「娘の変化に気づかなかったのは、親の責任ですよ。申し訳ありません。ですが、今は勤務時間でですので、また別の機会にお話できませんか」

木野さんの顔色は全く変わらない。初めから決まっていたセリフを読み上げるように、すらすらと言葉を並べた。でも、僕は気づいてしまった。木野さんのまっすぐ下げた両手はぎゅっと握られ、小刻みに震えている。

「何を言ってるんです？ 短期間で解決しなかったから、ここに来たんです。だいたい、お宅の娘さんが、もう少しきちんとかこの件について話してくればよかったですか？ この件が発覚してから、お宅の娘さん、何を聞いても話したくないの一点張りですよ、困ります」

村井さんの奥さんの眉間にはしわが見え隠れする。とにかく必死に言葉を紡いでいる感じがする。それから数秒ののち、木野さんはゆっくりと口を開いた。

「うちの娘の行動は、いいことではないかもしれない。でも、うちにはそんな余裕がないんです。受験の終わったご家庭とわけが違います。うちの娘にも、今は話したくないことくらい、あってもいいのではないですか」

木野さんがこんな風に話すのを、僕は初めて聞いた。それまでビジネスライクだった声に、初めて感情がこもったのがよくわかる。

「それとこれとは別問題です。自分がいくら苦しくても、人を苦しめていいわけではないですよ。ね？」

村井さんの奥さんの声に混じる不安の色は鈍感な僕にも感じられた。木野さんは唇を噛み、少しくつむいた。

「あっ、あの、少し落ち着いて…」

僕の声は場の空気に飲まれて、ろうそくの火が消えるようにすっとかき消された。

「とにかく、真実を知りたいんです。学校を通してものが進展しないものですから、直接聞きに来たんで…」

昼休みが残り五分だと告げる放送が流れさすがに村井さんの奥さんの話は中断された。その様子を確認し、僕はその場に崩れ落ちそうになってしまった。視線が泳ぐ。見ると、受付の向こう、入口にたくさんの高齢者の姿が見えた。

「あのー、私たちはどこに行けばいいんでしょう」

七十代くらいのおばあさんがゆっくりと口を開いた。そうか、僕には仕事がある。崩れそうになつていた体をぐっと踏ん張り、姿勢を直す。

「こちらです、ご案内しますね」

僕は木野さんと村井さんの奥さんに小さく頭を下げてその場を離れる。では私も行かなければなりませんので、という木野さんの声が後ろから聞こえる。僕は振り返ることもできずに午前中掃除した教室に向かった。

高齢者教習を終えると緊張の糸が切れたのかどっと疲れてしまった。繁忙期の勤務が終わって、家に帰った時に感じる疲労によく似ている。指導員室に戻ると、隣の席の村井さんが話しかけてきた。

「さっきはすまない。俺が席をはずしてたばっかりに、知らないうちにあんなことになっていて」
罪滅ぼしと言わんばかりに、自動販売機で買ったものと思われるオレンジジュースを僕に渡しながら言う。

「ここ何日かは特に、奥さんがピリピリしてたのは知ってたんやけど…とにかくこんな思いをさせて悪かった」

「いえいえ…」

「木野さんにもこのあと謝って話そうと思う。うちの奥さん、思い立ったら即行動するところがあるから…。俺もまさかここに来るとは思わなかったんだが…受験騒動に巻き込まれて、なんかいろいろ狂っちゃったなあ…」

村井さんの目から、いつものような力が感じられない。決して大きくない体は、さらに一回り小さく思えた。

「娘さん、大丈夫なんですか」

「娘はまた最近忙しそうで、俺もなんだか気まずくて、なかなかその話題を振ってないんよ。ただ、なかなか解決には向かってないらしい」

「そう…ですか」

僕はいつもこうだ。大事な時ほど言葉が出てこない。自分はすぐ人のことを心配するくせに、フォーローができるほど人間ができていない。

ただ、これだけは分かる。村井さんの奥さんも木野さんも、自分の娘のことを思いやっている。村井さんの奥さんは一刻も早い解決で娘を救いたいと必死で、木野さんは優秀ながら受験に苦しむ娘を今はそっとしておきたいという気持ちがあるのだろう。

「木野さんのところに行くってくる」

意を決したように、村井さんは席を離れた。

僕の実家のある山奥の地域は、職場のある街中より早く冬が来る。朝の冷え込みが徐々に厳しくなり、吐く息が白くなる。草むらには霜がおり、部屋のカーテンを開けると窓ガラスの結露が顔を出す。

ほどなくして、自動車学校の冬も本格的に始まった。就職が決まった高校生は冬から春にかけて免許を取りに来る。毎日夜遅くまで、みっちり働いた。実家に帰り、玄関先でふと空を見上げると、おびただしい数の星が顔を出していた。オリオン座は星座に全く興味のなかった僕でもさすがにわかる。その堂々たる輝きに圧倒され、僕はすぐに玄関のドアを開けた。

あの高齢者教習の日以降もまた、村井さんは例の一件については口をつぐんだ。僕も聞こうとはしなかった。お互いにもうそのことについては話さないことが暗黙の了解として出来上がっていた。もっとも、忙しくなったから村井さんと話す余裕が減ったこともあるのだが。

「交差点を右折するときは、まず対向車をよく見て、自分が曲がれそうになったら、横断歩道の歩行者も確認して……」

路上教習に向かう前に、その日抑えるべきポイントを教習手帳の中に書き込んで教えるようにしている。幾度となく行ってきたこの解説だけは、すんなりと言葉が出てくる。

ただ今日は、一つだけ問題があった。使っている三色ボールペンの黒いインクが切れかけてい

る。僕としたことが、ストックを買っていなかった。今日は赤と青のインクを使うことにして、帰りにコンビニにでも寄って買って帰ろう。

夜八時過ぎのコンビニは、思ったより客が少なかった。というか客は僕だけのような気がする。あまりにも寒かったので、飲み物売り場で温かい緑茶を一本手に取る。丸いペットボトルの形に手を沿わせ、文房具売り場へと向かう。

「あっ」

狭い通路を曲がった先の文房具売り場が視界に入ったとき、呼吸するように自然に声が出てきた。売り場にいた先客がこちらを見る。

黒いセーラー服に学校指定の黒いコート。そして艶のある黒い髪。肩まで届く長さに伸びていたけれど、それでもすぐわかった。

偶然とは恐ろしい。僕は気ますぐなくなって、他の売り場を見るふりをしようかと考える。でもそれはできなかつた。僕が動くより先に、ローファーで床をける音が近づいてきた。

「えっと…平川さん、ですよね。父がお世話になっています」

「あなたは確か、村井さんの…」

「はい。娘の佳澄かすみです」

これまで二回会った時は、彼女から口を開くことはなかった。それが今日は、僕の方をまっすぐに見て、しっかりとした口調で話しかけてきた。正面から見た顔はやはり村井さんそっくりだ。

「こんな遅くにどうしたの？」

とっさに思いついた質問をひとまず返す。

「学校で自習してたから遅いだけです。シャーペンの芯がなくなっちゃって」

なるほど、とうなずきなながら返した。彼女の目はまだまっすぐに僕をとらえている。じゃあこれで、と言って別れることのできる雰囲気ではない。

「両親の話をなんとなく聞いて知りました。その節は、本当に申し訳ございません」

彼女は深々と頭を下げた。きっとあの高齢者教習の日のことだ。そんなの終わったことだし彼女が謝る問題ではない。

「そんな…謝ることじゃないよ」

これが僕の精いっぱいのおフォワード。急にそんなことを言われたから混乱してしまって、言葉も考えも追いつかない。そんな僕を尻目に、彼女はさらに続ける。

「あの時は、私もですけど、みんな冷静さを欠いていました。それがいけなかったんです」

「今は、佳澄さんは、もう大丈夫なの？」

「はい」

確かに、あの病院で会った時の顔とは違う。僕は安心を覚え、次の言葉をかける。

「よかった。じゃあ、解決したんだね」

「いいえ」

予想外の返答だ。明らかにもうすべてことが片付いて元気に頑張っています、という感じにし

か見えないのだが。

「もうさすがに前みたいになつたらさはないですけど。お互いに話し合うとか、謝って関係がもとに戻ったとか、そういう解決には至ってないです」

それにしても、彼女の声も顔もすっきりしている。謎は深まるばかりだ。

「でも、その割にすごく元気そうだよね」

「もうある程度、過ぎたことでもありますから」

彼女の口調は落ち着いていて、どうかすると自分より年上のようにも思える。

「解決しないままにして、それでいいの？」

「もちろん、いつかきちんと話し合つて解決出来たらそれに越したことはないんですけど」

彼女は息を吸った。その息遣いは、静かな夜の店内だとはっきりと感じられた。

「少なくとも今はまだかなあつて思うんです」

「でも、佳澄さん苦しかったんだよね？それは相手にきちんと求めていいと思うんだけど。僕も全部の事情は知らないから、こんなこと言うのもだけど……」

彼女のさっぱりした顔や口調と状況がかみ合わなくて、僕は続けざまに問う。彼女が心を痛めたことは間違いない。しかし彼女自身には、例えば相手に謝ってほしいとか、口に出さないにしても恨めしい思いなどがあるのではないのか。

「でも、向こうも苦しんでいますから」

その声には、確かな意思が感じられた。彼女はこう続ける。

「私の苦しみはきつと何を言っても向こうに完全にはわかってもらえないと思います。それと同じで、私も、相手の苦しみ…成績優秀なのに大学に落ちて、冬まで追いつめられる気持ちは、想像しかできません。理解するのはきつと無理です。実際にその立場に立つ人にしか、感情は体験できない」

「でも、相手だってあなたのことを想像できるんじゃないの？」

自身に非がないのに、あきらめの境地に達しているようにも思える彼女の言動に、僕の口は自然と疑問を呈していた。

「この間、両親にも言ったんですが」

言葉を大切に置くように、彼女は一瞬目を伏せて、それからまた僕を見つめて言った。

「うちの父、いつも言ってるんです。事故は結局心の問題だって。それは物理的な事故だけを指すものじゃない。私は自分の周りの状況の変化についていけなくて混乱して苦しんだ。両親もまさか大学入試でそんな問題に巻き込まれるとは思っていなくて驚いてしまった。相手もきつと、こんなに不合格がこたえるとは思ってなかったんだと思います。だから、その。私たちはみんな、ある種事故を起こしていたんです。心の事故」

「心の、事故…」

僕は彼女の言葉を正確に理解しようと努めた。

「そう、事故なんです。私はそれに気づいてから、今無理に解決を求めるべきではないと思うようになりました。きつと向こうは今、私より苦しんで、私よりも必死で、もしかしたら周りが見

えていないかもしれない。だから、こちらが冷静になって立ち止まらないと、またきっと衝突事故になる。私はまだ免許ないから詳しくは知りませんが：明らかに相手がスピード違反で追い越してきても、こちら側は追い越されまいと対抗してスピードをあげたりはしないですよ？そうしたら、事故になっちゃうから。それと同じです。今は私が減速していれば、事故は起きないはずです。何より、向こうは、莉奈は普段はもっと穏やかで、絶対に自分を安全にコントロールできる人だって、私は知っていますから」

彼女と僕の間にはばらく沈黙が流れた。心の安全、という言葉が腑に落ちて、僕は黙ってうなずくだけだった。彼女は、僕はもちろん、村井さんや、周りの大人たちより、はるかに自分の置かれた状況をよく理解している。

「あ、すみません。長々話してしまっ」

はっと我に返ったように、彼女が慌てて口を開いた。いやいや、気にしないで僕は手と首を横に振りながら応じる。

「でも、平川さんには、もし会ったら言おうって思っていました。ご迷惑をかけたことを謝りたかったっていうのもありますけど、きっとこの話を理解してくれると思って」

彼女の目はどこまでも深くまっすぐだった。初めてスーパードで会った時のように控えめに頭を下げ、会計を済ませるとスタスタ歩いて外の闇に出て行った。

僕は彼女の後姿をしばらく見送っていた。彼女の言葉にはずっしりと重みがあって、でも僕の胸にすっとしみ込んできた。

別の客が入ってきた。一瞬開いた自動ドアから風がひゅうっと入り込んで僕は寒さを思い出す。握っていた緑茶のペットボトルは、もう徐々に温かさを失い始めていた。

「今日は縦列駐車をやってみよう」

あれよあれよという間に年が明け、また僕の日常が動き出した。その日常が平凡で、安全であるように。今の僕は前よりずっと強く願わずにはいられない。

あの日、コンビニで佳澄さんに会ったことは村井さんには言っていない。村井さんの方からも、その件に関する話もう聞かない。ただ、わずかな休み時間に缶コーヒーを手に笑う村井さんを見ると、もうその話をする必要などないのだと思う。僕だけじゃない、大人たちが忘れかけていた心の安全を彼女が思い出させてくれた。それからの日々は穏やかで、忙しくても時間がゆっくりと過ぎていくような気がした。

昼前の教習が終わったタイミングで、平川先生、と呼ぶ事務員さんの声でした。僕に電話がかかってきたらしい。

「もしもし、指導員の平川です」

「あ、もしもし先生。お久しぶりです」

電話の向こうの声に覚えがあった。彼はこう続けた。

「近いうちにまた、教習を再開したいんですけど……」

あの事故から数か月。彼の中で、きっと葛藤も苦しみもあっただろう。でも今僕の耳に響く彼の声は、控えめだけど、あの快活さがのぞいている。

「もちろん」

僕はかみしめるように言った。細かい日程などの事務連絡を済ませ、静かに受話器を置く。

指導員室に戻った僕は、いつものように背伸びをして弁当を食べる。いつもの味、梅干しの甘酸っぱさも、卵焼きの柔らかさも体の隅々に染みわたる。

昼食を終えると、午後から学科の授業で使う教室に向かった。カーテンと窓を開け、換気してから暖房をつけようと思ったのだ。

風は相変わらず冷たい。でもこの時間は太陽が高く陽だまりを作り出している。もうあと数週間、この地域ではウグイスの声を聞けるはずだ。

再び強く北風が吹いて、僕は窓を閉めた。冬は厳しい。でも、窓ガラスに反射する光が、次の季節の確かな到来を予感させる。

午後からも忙しい。僕はこれからも、ここできつと平凡な日々を送る。めぐる季節の中で、春風のように穏やかな心を持っていたいと願いながら。

（文学部コミュニケーション情報学科一年）

東光原文学賞総評

選考委員長 坂元 昌樹

「凡そ文学的内容の形式は (F+U) なることを要す」とは、一九〇七年に刊行された夏目漱石『文学論』中に登場する著名な言葉です。漱石は、Fは焦点的印象又は觀念を意味する認識的要素であり、fはFに附着する情緒を指示する情緒的要素であると定義しています。FはFocus (焦点)、fはfeeling (情緒) の頭文字を取ったものと考えられています。『文学論』における漱石は、英文学を中心とする豊富な古今東西の文学を対象として、この (F+U) の形式を通して文学の特性と構造を分析しています。漱石の『文学論』は、単なる文学の考察を超えて、個人と集団についての心理学的分析の側面を持ち、漱石の創作との関係でも興味深い著作です。

附属図書館の主催で歴史を積み重ねた東光原文学賞は、今年度で第十四回を迎えました。今年度の応募作品には、漱石『文学論』の定義に重ねるならば、複雑な (F+U) の結合が現れていました。そこでは、多様なFが描かれ、各種のfが語られていました。今回の審査に携わった一人として、多くの優れた応募作品を拜読する機会を持たれたことに感謝しております。

大賞作の『群青』は、老境の男性が一人称で自らの生涯を回想する物語です。夜更けの病院を

舞台上に死を間近にした老人がある訪問者に語るという作品設定が効果的であり、少年時代からの生涯を語るその語り口が巧みな小説でした。作中の父の死、少年時代の障害、「群青」をめぐる記憶、代用教員時代の経験など、個々のエピソードにも深みがありました。一人称での語りがよく練られた秀抜な構造を持つ作品であり、審査を務めた岩瀬委員からは「高い筆力に文学性が漂う」という講評、同じく松岡委員からも「完成度が高い」「手練れの作品」というコメントがあるなど、審査委員全員が一致して秀作として選出し、今年度の大賞作となりました。

優秀作である『傷口』は、大学生「私」の一人称語りによる恋愛とその喪失をめぐる物語です。大学生の日常生活が会話を含めて高いリアリティを持って描写されており、SNS上の言語の使用も効果的で、ストーリーテリングにも巧みさを感じられました。語り手による一つの言葉が連続する一節の表現、また結末部分も登場人物の心情を強烈に訴えて印象的でした。本作については、岩瀬委員からは「徹底的に具体的な描写」で「切実な世界観を描き切っている」というコメントがあり、松岡委員からも「不思議な説得力を持つ」「熱量も異様に高い」という評価があるなど、この小説の文章が持つ訴求力が、審査の際にも高く評価されました。

同じく優秀作の『海辺の光——ある作家へ——』は、一人称「僕」の語りと「僕」自身による「小説」が融合した作品です。死者である「僕」による小説の考察という設定を含めて、アンチ・ロマンの性格を持つ作品ですが、小説中の各種イメージは豊饒であり、作品内での詩と小説に関する文学論など、作者の豊かな知性を示す作品でした。本作には、岩瀬委員から「極めて高い独自の作家性を感じさせる」という講評、松岡委員からも「メタフィクションを目指した意欲的な

作品」というコメントがあり、その先鋭な試みが高く評価されて優秀作に選ばれました。

もう一つの優秀作の『春が来るまで』は、自動車教習所で働く一人称の「僕」が仕事を通して経験した出来事を語る物語です。教習所で働く青年の設定は具体的でリアリティがあり、作者の優れた観察力を感じさせるとともに、登場人物の造型も自然であり、プロットに巧みに組み込まれていました。「心の問題」というテーマを軸とする作品構成にも妙がありました。岩瀬委員から教習所で働く青年を主人公とする物語設定への評価があり、松岡委員からも「作品に清涼感があり、文章は安心して読ませる」という講評があるなど、同じく優秀作となりました。

他にも、今回受賞に至らなかった作品も、第一次選考を経た作品は、それぞれ受賞作に迫る魅力を持ち、同様に固有の(㊦㊧)の結びついたあり方が描かれていました。亡くなった祖母をめぐる回想を軸に多様な語りを加えた物語『ご飯は何にしよう』、定年退職後の男性と少年の二人の語りから巧みに構成された作品『てのひらのあめ』、アイドルとアイドルを引退した二人の女性の関係の機微を細やかに描いた作品『アイドルとアルコール』、人間と魔法使いが共存する魅力的な世界設定の作品『ハンド・イン・レジスタンス』、思春期の少年が友人との交流を通して成長を遂げる読後感の爽やかな物語『主人公(ヒーロー)』など、今回は残念ながら受賞には至りませんでした。それぞれが優れた表現力や構成力を示しており、印象に残る作品でした。

今年度の応募作品は、第一次選考を通過した作品は、世代を問わない孤独感や閉塞感、一種の悲哀の感情を描いた作品が目立ちました。先に漱石『文学論』は、文学作品の考察を超えた個人と集団をめぐる心理学的分析の側面を持つと記しましたが、今回の応募作品の傾向は、世界的な

新型コロナウイルス感染症流行以後の困難を経験する現在の集団的なFの反映であり、時代的なfの反映かもしれません。そして同時に、各応募作品が共通して示していたものは、時代の困難を認識した上でそれらを克服して生きようとする明確な意志を示す(㊦+㊧)の結合でした。

周知の通り、漱石は、熊本大学の前身である旧制第五高等学校(五高)ゆかりの人物です。私は、五高・熊大の表現活動の文化的土壌を現在に継承する企画が、この東光原文学賞であると考えています。そのような五高・熊大の文化的土壌の要素を一つ挙げるとしたら、それは表現行為を通して自分自身や時代、世界を深く凝視して認識し、その上で意志的に生きることを目指す姿勢であると考えます。そこには、いわば(㊦+㊧)をめぐる豊かな結合の伝統の持続があります。今回の東光原文学賞を受賞された皆さんを含めた本学の学生の皆さんが、そのような表現行為をめぐる試みを、今後も様々な場で開始し、継続されることを願っています。

あらためて、今回受賞された皆さん、また惜しくも受賞に至らなかった皆さんも含めて、今回の東光原文学賞へ作品を応募された皆さん全員に感謝いたします。そして、最後となりましたが、この度の東光原文学賞の企画運営にご尽力いただいた田中朋弘附属図書館長をはじめとする附属図書館の皆様方、審査委員をおつとめいただいた岩瀬茂美先生と松岡浩史先生に、深く御礼を申し上げます。

●坂元昌樹（さかもと・まさき）

熊本大学大学院人文社会科学部（文学系）教授。専門は日本近代文学。

主な近著として『へ文学史』の哲学 日本浪漫派の思想と方法』（翰林書房、二〇一九年）、

『夏目漱石の見た中国 『滿韓とこころ』を読む』（集広舎、二〇一九年、共編著）、

「明治期日本の生と死をめぐる言説」（荻野藏平／トビアス・パウアー編『生と死をめぐる

ディスクール』九州大学出版会、二〇二〇年）などがある。

講評

選考委員 松岡 浩史

『第9地区』（ニール・ブロムカンプ監督、二〇〇九年）という映画を見たことがありますか？舞台は一九八〇年代の南アフリカ共和国。ヨハネスブルク上空に謎の宇宙船が飛来するところから物語は始まります。見かけがエビそっくりの乗組員は地上に移され、隔離施設「第9地区」で管理されます。このエイリアンたちの汚らしいことといたら！食欲、性欲、戦闘欲丸出しで、見るものを嫌悪感で満たします。こいつらを殲滅してしまえばいいのに！——私はそう思いました。ところが映画は物語の後半で、クリストファーという名の「エビ星人」と、さえない小役人ウィカスが協力して権力と闘うバディ・ムーヴィー（二人組が主人公になる映画）になっていきます。そこで私は気づきました。この映画は差別についての映画なのだ。そして、差別していたのは、他ならない私であった。物語の舞台がアパルトヘイト政策を推進した南アフリカであることも後から納得しました。

映画、小説、演劇——表現媒体はいろいろありますが、テーマを語ってしまったら負けなのだと思えます。「差別反対！」と声高に叫ぶのではなく、読者、観客を物語世界に引き込み、追体験

させる。テーマを語るのではなく、映画なら映像で、小説なら言葉で、演劇なら台詞と身体で、それぞれの媒体の特性を活かして描く。それが優れた作品の要件の一つだと言えるでしょう。

今回で選考委員を務めるのは四度目になりますが、候補作を鑑賞するときにもいつも尺度とするのがテーマ (what) と手法 (how) のバランスです。各々の作品は、伝えたるべき世界観を持っています。傾向としては、周囲に溶け込めない自分という存在、すなわち文学の初期衝動といってもいい〈孤独〉を起点としてモノローグ (一人語り) で物語が進行していく。クライマックスに至ると、散文詩のような形式で抱えていた情念が噴出する展開となることが多い。これは決してネガティブなことではなく、書き手が誠実に作品、そして等身大の自己と向き合っていることを証明しています。しかし、例年大賞に選出される作品は、モノローグから脱却し、そこにある世界の手触りを感じさせる作品が多い。

大賞作の『群青』は、病床の老人が一人称で訪問者に自分の生涯を回想しながら語る、という物語設定になっており、独特の質量と安定感が感じられる文章は、たいへん抑制が利いています。声高に何かを叫ぶことをせず、父の死、少年時代に負った障害、戦死した弟、代用教員時代に出会った少年のエピソードを淡々と物語るその語り口は、その人物が確かにその時代に生きたのだ、と読む者に確信させます。どんな作り手も、フィクション内の人物に存在感を持たせることに全力を注ぐものですが、そこには、熱量だけではなく、ディテイルの描写を含む人物造形の技術が不可欠なのです。本作では、その人物が生きた、ということ自体がテーマであり、その実在を表現するための手法と美しく融合していました。

優秀賞の『海辺の光―ある作家へ―』は、小説についての小説。メタフィクションという手法で自己言及的に小説とは何かを追求した意欲作です。『傷口』もまた、描写が具体的に説得力がある作品。情念に駆動された躍動感候補作の中で群を抜いていました。自動車学校に勤める社会人二年目の「僕」の日常的な心象を丁寧を描いた『春が来るまで』は、その丁寧な語り口と情景描写で作品世界にリアリティがありました。効果的に使われる梅干しのイメージも、語り手の誠実さと相俟って、心の問題をテーマとする本作に甘酸っぱい後味を残しています。

実は令和三年度は、文学部の概論の授業で文学理論を扱いました。文学を文学たらしめるものは何か。「どこかへ、ぶらっと旅に出たいんだ」という文と、「近いと思えば遠く、親しくもあり隔たってもいる不可解な距離に、いつも澄明に浮かんでいるあの金閣が現れたのである」という文は、どちらも三島由紀夫の『金閣寺』からの引用です。前者よりも後者の方に「文学性」を感じるとすれば、そこに日常言語とは違う異質な雰囲気を感じ取れるからです。ロシア・フォルマリズムの批評家はこれを「異化効果」日常言語に加えられる組織的暴力」と呼びました。例えば駅に立つあなたは「今日は運転手がストライキ中ですよ」と声をかけられるかもしれない。しかし、「汝、いまだ犯されざる静寂の乙女よ」（イギリスの詩人、ジョン・キーツの一節）と囁かれた瞬間に、そこには日常を破壊する文学の世界が立ち上がる。候補作は各々、日常からの逸脱を試みています。しかし、文学的世界を構築するのに、必ずしも『第9地区』のような非日常を描く必要はありません。なぜなら日常の中にこそ、一人ひとりが抱えている、劇的なナラティブ（物語）があるからです。

●松岡浩史（まつおか・ひろし）

熊本大学大学院人文社会科学部（文学系）准教授。専門はシェイクスピアを中心とする英米演劇。

著書・共著に『文学と歴史の曲がり角―英米文学論集』（英光社、二〇一四年）、『ヘルメスたちの饗宴』（音羽書房、二〇一二年）、『シェイクスピアの広がる世界―時代・媒体を超えて「見る」テキスト』（彩流社、二〇一一年）、『世界の鏡としての身体―シェイクスピアからアニメーションまで―』（身体表象文化学会、二〇〇八年）などがある。

講評 新しい自分と出会う

選考委員 岩瀬 茂美

小説家の島田雅彦さんが数年前の芥川賞選考で、「小説の醍醐味」について「自分の周囲の観察を通じて、異変や深淵や真実を発見してしまうこと」と書いている。だから「身辺雑記はある意味、王道でもある」のだという。

その観察眼は日常の神秘をすくい上げようとはしているのだが、時に「物足りない」ことがある。語り手が欲望や悪意を抑え、行儀よく、現実を回避してしまうからではないか、と島田さんは考察している。身辺雑記が始まりでも、どこまで深度を獲得できるかが問われているのだろう。

さて、東光原文学賞の選考委員も六回目になる。学生たちは、自分自身や世界をどんなふうに見つめ、何を発見したのだろうか。選考委員として、それを発見することが最大の楽しみだ。

個人的な選考基準は三点ある。「文章」「構成」「インパクト」から分析し、総合的に考察している。まなざしの深さを感じさせる文章かどうか。物語の完成度はどうか。熱量を感じるか、作品が提示する世界観は魅力的か。

大賞『群青』は、完成度の高い作品。骨格がしっかりとした物語に文学性が漂う。病院を舞台

に、東北の小さな漁村で生まれた「老人の昔話」が始まる。父の死、失った右目の視力と人差し指、海への思い、戦死した弟と代用教員で出会った少年……。淡々とした語りを紡ぐ文章には俯瞰した視点と安定感があり、「あの時代」を生きた名もなき人々の姿が鮮やかに浮かび上がる。

優秀作『傷口』は、まなざしの深さを感じさせる恋愛小説。徹底的に具体的な描写で学生生活をリアルに描き、同様に、強くてもろくて切実な感情も描ききって、胸に迫る。ネットと現実の世界を交錯するように生きる若者の姿が現代的であり、独特のユニークな表現も面白い。なぜだかミュージシャン「あいみょん」的な世界観を感じさせ、今回の「推し」の作品だった。

優秀作『海辺の光―ある作家へ―』は、実験的な構造を持つ意欲的な作品。多様なテキストを提示しては作者自ら批評を重ねる。思考の断片や物語、詩などをめぐって考察が続いていき、難解ではあるのだが、最後まで破綻なく展開している。地力の高さと、極めて高い作家性がうかがえる。「純真と嘘と怪獣」の挿話が美しい。

優秀作『春が来るまで』は、作品を貫く肯定的な世界観が魅力の青春小説。仕事、職場の舞台設定は東光原文学賞では珍しいが、多様な年代が登場しても、無理なく読み進めることができる。ナチュラルな文章で、他者の回復と自らの成長の物語が丁寧に誠実に描かれる。どこか「滋養」を感じさせる作品で、読後感もよい。

このほかの作品では、『てのひらのあめ』は物語に引き込む力があり、『ご飯は何にしよう』はじんわりとした味わいがあった。

新型コロナウイルス禍の日々を映すかのように、今回も「孤立」を背景とした作品が目立った。

今の時代を生きる基本設定なのかもしれない。受賞作をあらためて振り返ると、小説のタイプに違いはあるものの、どの作品にも書き手の切実な声が響いている印象があった。自分自身や現実を見つめ、何かを発見する。そして、それを描ききる意志が、作品の「芯」のように存在している。

そうした切実な意志は、読み手側にも共振していく。小説の醍醐味にはもうひとつ、誰かの物語が自分の人生と重なりあって響き合うこともあると思う。新しい発見は、書き手だけではなく、読み手の人生もより深いものに変えていく力があり、そこに未来への希望が存在する。今回の作品が、新しい自分と出会う端緒になってくれたら、うれしい。

● 岩瀬茂美（いわせ・しげみ）

熊本日日新聞社統合編集本部長兼論説委員。一九六三年、八代市生まれ。一九八八年、熊本日日新聞社入社。社会部、天草総局、編集本部、荒尾支局などを経て、二〇〇七年編集本部長、二〇一一年社会部次長、二〇一二年同次長兼論説委員。二〇一四年文化生活部次長兼論説委員、二〇一七年編集委員兼論説委員、二〇一九年地方部長兼論説委員。二〇二〇年編集局次長、二〇二一年三月から現職。主な連載企画に「水保病40年」「水保病小史」「水保病は終わっていない」（平和・協同ジャーナリスト基金賞特別賞）、「30代の地図」「熊本地震 連鎖の衝撃」「熊本地震 あの時が」など。

第十四回熊本大学東光文学賞作品集

発行日 二〇二二年三月三十一日

編集・発行

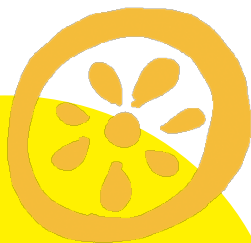
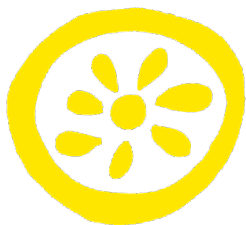
熊本大学附属図書館

〒八六〇―八五五五

熊本県熊本市中央区

黒髪二―四〇―一

印刷 株式会社かもめ印刷



To Mr. Soseki

